
世田谷一家惨殺事件

藪 冬彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世田谷一家惨殺事件

【Nコード】

N9287V

【作者名】

藪 冬彦

【あらすじ】

2000年12月31日午前10時55分、親族が発見し警視庁に通報を入れこの事件が発覚した。成城警察署に特別捜査本部が設置された。国枝大輔は、この第二・三・四強行捜査の各係の精鋭が集まった班をまとめ上げる大任を任されたのである。しかし事件の捜査は思わぬ展開を迎える。

プロローグ（前書き）

世紀末に起こった悲惨な事件です。未だに犯人の検挙に至っていません。犠牲者のためにも絶対に風化させてはなりません。

プロローグ

2000年12月31日午前10時55分、親族が発見し警視庁に通報を入れこの事件が発覚した。

移動性高気圧は東方海上に抜け、中国東北地方には前線を伴った低気圧が進んでいた。

その日東京は曇り、最高気温は7.3度とこの冬一番の寒さとなった。

世田谷区上祖師谷地区は、西側に仙川、東には都立祖師谷公園が広がっている。

北側には駒沢大学野球部のグラウンドと、子供を育てるには最適な環境を備えている。

宮沢みきお一家は4人家族で夫はCI関係の会社に勤務、妻は学習塾を経営し、8歳の長女と6歳の長男の二人の子供に恵まれたごく普通の円満な家庭だった。

21世紀を目前に控えた12月30日、その日家族4人は自家用車で成城学園前駅でショッピングを楽しんだ。

「お父さん、今度の映画の仕事はアニメなの？」と長男が訊いた。

「いや、今やっているのは実写版のアニメ作品なんだよ ミニチュアの模型を作って少しずつ動かすんだ」とみきおは長男に笑いかけた。

「へえ 面白そうだね」長男

「この間、航空機の模型にお父さんが色を塗ったんだよ」得意げに父親がいう。

「でもねお父さんはね、本当は俳優さんに成りたかったんだよね パパ！」と妻が口を挟む。

「木村拓哉みたいなのトレンディ俳優だったらよかったのにな」と長女も茶化すように言った。

「おいおい、母さんだつて女優を目指して頑張ってたんだぞ」とみきおは妻に話しを振った。

「もう 昔の話しはやめて！」と逃げるように商店街を先に歩き出した。

男二人に、ベーと舌を出した長女が後に続いた。

「今日の夜も撮影スタジオにいかなくちゃいけないんだ」と息子に言った。

「お父さん頑張つてね 今度見学させてよ 約束だよ」と言いながら姉を追った。

買い物の帰り際、千歳烏山駅近くのファーストフードに寄ってハンバーガーを買い午後6時に帰宅した。

自動シャッターが開き、車庫に車をバックで入れる。

その時、宮沢家の様子をじっと遠くから見つめる一人の若い男がいた。

プロローグ（後書き）

亡くなられた宮沢家の家族のご冥福を祈り・・・合掌。

侵入者

自宅は2階建て屋根裏部屋付きの瀟洒な建物であった。

しかし、都立祖師谷公園の拡張工事が進められており、宮沢家も立ち退き区域に該当していた。

もう周辺には3軒ほどしか住宅が残っていなかった。

宮沢家も東京都との交渉でようやく移転先も決まり、年明けの春には転居をする予定であった。

立退き料もかなりの額が振り込まれたようだった。

お金にからむ噂話は瞬く間に広がるように、立退き料の額も尾ひれがついて巷では好奇の目で見える人々もいた。

やっかみ半分の嫌がらせの電話もよくあったという。

午後10時を回り、妻と長女は3階の屋根裏部屋に、長男は2階の子供部屋に就寝していた。

父親は12時までに撮影スタジオに入るために身支度を始めた。

その頃、若い男は自転車を宮沢家裏の児童公園の中に隠し、徒歩で宮沢家に忍び寄った。

気温もぐつと下がり男の吐く息が白く、まるでタバコを吸っているようだった。

男はジャンパーの襟を立てマフラーを結び直してから帽子を目深に被った。

最後にヒップバックの中のものを確認し、黒い防寒手袋をした。

腕時計を見ると午後11時を回っていた。

男は公園のフェンスに足を掛け木によじ登った。

2階にある浴室の網戸を外した。

浴室の窓は、予想通り施錠していなかった。

男はニヤリとほくそ笑んだ。

致命傷

父親は1階の書斎で、身支度を済ませ、靴下を履き替えていた。

ソファーに腰掛け、右足先を紺色のソックスに通し始めた。

その時、2階から長男の叫び声があったように感じた。

胸騒ぎを覚え、靴下を片方だけ履いた状態で2階への階段を駆け上がった。

男は浴室に侵入した後、長男の部屋に押し入った。

ジャージ姿で寝ている子供を、男は手で首を絞めていった。

息苦しさを目覚めた長男は、必死で男の手を振り解こうともがいた。

大人の力に抵抗しても所詮6歳の力だった。

「パパママ 助けて！」と心の中で絶叫した。

鼻から血が噴出し、長男は意識が薄れて行くのを感じた。

異変に気付いた父親は、長男の名前を呼んでドアを開け、部屋に入った。

薄暗い部屋の子供のベッドの前に、見知らぬ人間が立っていた。

刺身包丁を右手に持ち、自分の身に向け、振りかざそうとしていた。腰を引きながら両手で頭をかばったが、手の平を貫いた刃が脳天にガツツと刺さった。

何がどうなったのか、痛みは感じられない。

唯、逃げなければ殺されると、父親は咄嗟に思った。

次から次と刃が襲ってきた。

見知らぬ男は、必死の唸り声を上げながら手当たり次第に父親の体めがけて刺身包丁を振り下ろしていた。

父親の血が噴出し、男が返り血を浴びていた。

あまりの恐怖のために、父親は声を発することが出来なかった。

頭の中では、妻や子供たちの事が気に掛かっていた。

俺がやられても、その間に逃げて欲しいと祈る。

指が何本か跳んでいったようだった。

父親は、男に覆いかぶされながらも這って階段までたどり着き、転げ落ちていった。

背中に無数の刺し傷と太腿の裏にも動脈を損傷するほどの傷を負っていた。

父親は不自然な体勢で階段下に落ちた。

だが夥しい出血で既に彼の意識は混濁していた。

2階の踊り場から男が上半身を覗かせ、肩で息をしている。

「お父さん！パパ！何かあったの」声を聞いた男は振り返った。

そこには、3階に通じるロフト（屋根裏部屋）のハシゴがあった。

第一報

31日の朝 9時2分

隣に住む宮沢泰子の実母（浅子）は、何度電話を架けても通じない隣家に不審を抱いた。

昨夜、娘と話をしたばかりで午前中に正月料理の打ち合わせをする予定だった。

浅子は、宮沢家を訪れたが玄関の鍵が閉まっていた。

1階の室内灯は点灯したままで、声を掛けても人の気配は感じられない。

浅子は、家に戻り合鍵を持ち出した。

「みきおさん 泰子 居るのかい？」と室内に声を掛けながら入っていった。

そして1階の階段下に絶命している父親を見つけた。

「みきおさん！・・・」絶叫。

義兄が駆けつけてきた時には、浅子は2階の踊り場に横たわる変わり果てた娘と孫の遺体にすがりついて泣いているところだった。

義兄はみきおの死顔を見て、腰が抜けたようにその場に崩れてしまった。

午前10時58分 警視庁指令センター経由で成城警察署に一報が入り、署員が駆けつけた。

その後、警視庁捜査一課から殺人担当の三つの係が出動、機動捜査隊などと合わせて成城警察署に特別捜査本部が設置され、統括係長として国枝大輔警部が抜擢された。

猟奇殺人

男は3階に通じるハシゴに手を掛け、いっきに引き下ろした。

勢いよく梯子段が降りてきた。

中で軽い悲鳴が聞こえる。

男は刺身包丁を手に、ゆっくりと昇り始めた。

母親の泰子と長女の8歳の（にいな）は、部屋の隅に寄り泰子が娘を庇うように立っていた。

「あなたは誰？何をしにきたの」母親は現れた男に向かって詰問した。

「・・・」顔だけ見える男は無言だった。

男の全身がやがて見えた。

泰子は口に手を当て絶句し、長女の目を塞いだ。

男の体中に返り血が振り注ぎ、手には黒いハンカチが巻きついた包丁が握られている。

その包丁の欠けた刃には、赤茶色の血が付着していた。

「おなた助けて！」と階下の夫を呼ぶように泰子は叫んだ。

やはり応答は無かった。

泰子は悟ったように、男に向けて懇願した。

「お願い命だけは助けて！何でもあげるから」

「……」男は無言で近づきはじめた。

長女が泣き始めたため、泰子は長女を背負うような形で盾になった。

いきなり包丁が泰子の顔面を襲った。

左耳から頬にかけてぱっくりと傷口が開いた。

泰子は左手で傷口を押さえたが、鮮血が噴出す。

また包丁が襲ってきた。

泰子は必死で両手を開き、包丁を防御して男に向かっていった。

その泰子の形相に、男もやや怯んだが立て続けに首や顔を切りつけた。

長女も母を助けようと男との間に割って入ろうとした。

3人もみ合いになっていた。

長女の顔に男の包丁が刺さった。

それを見た泰子は、ただ娘を庇うために男の手にしがみ付くだけだ

った。

何かの拍子に、男の手から包丁が落た。

男は慌てて拾った。

そして男は自分の左手を抑えながら「痛てえ」と声を漏らした。

男はどうやら手を切ったらしいと泰子は思った。

戦意を喪失した男は、階下に降りて行った。

泰子は長女の傷を見ながら、ティッシュを持ち出し顔の血を拭きだした。

「もう大丈夫よ、怖い人は行ってしまったから」と声を掛けた。

「ママは大丈夫？」長女は震える声で聞いた。

「うん ぜんぜん平気よ 心配しないでね」と泰子は安心させるように言った。

しかし、泰子の顔から流れる血は止まる事をしらないように流れていた。

二人はハシゴ段をやったのことで降り、2階の踊り場で助けを呼ぼうと泰子は電話を取った。

その時、泰子は背後から髪の毛を掴まれ、喉を掻き切られた。

ヒューという空気音が自分の首から聞こえる。

視線に飛び込んで来たのは、新しい包丁を握りしめる男の姿だった。仰向けに倒れた泰子は遠のく意識のなかで、長女の顔を覗き込む男の姿を見ていた。

「もうやめて！」と男に訴えたが声にならなかった。

そして意識が無くなった。

特別捜査本部

成城警察署に特別捜査本部が設置された。

警視庁捜査一課から殺人担当の三つの係が出動、機動捜査隊などと合わせて捜査を行っている。

警視庁は課員数300名弱。これを階級別にみると、トップが警視正（課長）、次に理事官、警視正の補佐役を担当する警視14名、その下に警部である係長が33名で構成されていた。

さらに警部補が100名以上、チーム 巡査部長も100名以上が現場の捜査に当たり、捜査一課は32個の係チームで構成され、10人前後の人員で一つの係りを作る。

通常、一つの事件に一つの係が担当するが、今回の一家4人殺害事件がいかに異例な捜査体制であり、社会的に影響のある大事件であったかがよく判る。

組織

捜査第一課（暴力犯。殺人、強盗、暴行、傷害、誘拐、立てこもり、強姦、放火などの凶悪犯罪を扱う）

第一強行犯捜査 - 強行犯捜査第1係（課内庶務）、強行犯捜査第2係（捜査本部の設置、連絡調整）、科学捜査係（科学捜査）

第二強行犯捜査 - 殺人犯捜査第1〜第4係（殺人、傷害事件の捜査）

第三強行犯捜査 - 殺人犯捜査第5〜第8係（殺人、傷害事件の捜査）

第四強行犯捜査 - 殺人犯捜査第9〜第12係（殺人、傷害事件の捜査）

第五強行犯捜査 - 特別捜査第1、第2係（未解決事件の継続捜査）

第六強行犯捜査 - 強盗犯捜査第1〜第6係（強盗事件の捜査）、性犯罪捜査第1、第2係（性犯罪捜査）

第七強行犯捜査 - 火災犯捜査第1、第2係（放火事件捜査）

第一特殊犯捜査 - 特殊犯捜査第1、第2係（誘拐、人質立てこもり事件担当）、特殊犯捜査第3係（航空機事故、企業災害事件捜査）

第二特殊犯捜査 - 特殊犯捜査第4係（特異事件捜査）

特命捜査対策室 - （未解決事件の継続捜査、行方不明者の捜査担当
約40名の捜査員配置）

捜査一課を構成する32個の係のうち、半分近い14個が殺人担当だった。

東京都内では年間200件程度の殺人事件が発生しており、このうち現場を所管する警察署と機動捜査隊による初動捜査で解決に至らない場合、特別捜査本部がその所轄の警察署に設置されるわけである。

国枝大輔は、この第二・三・四強行捜査の各係の精鋭が集まった班をまとめ上げる大任を任されたのである。

犯人検挙となれば、警視に昇進することが約束されていた。

初動捜査における状況報告と初の検死報告会が行われる。

事件発生後3週間が経っていた。

記憶

国枝は成城警察署のトイレにいた。

水道の蛇口をひねり冷水で顔を洗った。

これから事件発生後最初の合同ミーティングが行われる予定だった。会議室には30名の捜査官が集まり、事件の経過と検死報告が行われる。

現場に犯人の残した複数の物的証拠が押収されたが、犯人像を割り出すまでには至っていなかった。

国枝の顔にも少々焦りの色が窺える。

そんな時、国枝はある事件を思い出していた。

1989年11月3日、坂本弁護士一家殺害死体遺棄事件である。

当時、彼は神奈川県警の巡査部長として捜査に加わっていた。

坂本一家3人は、オウム真理教実行犯6人に自宅で殺害され死体を3県にまたがって遺棄されたのだ。

死体が発見されたのは、事件発生後5年10ヶ月が経ってからである。

警察の初動捜査の稚拙さと甘さが招いた結果だった。

その頃、国枝は勤続7年目で警部補への昇進を目標に努力していた。署内では県警上層部への内部批判も出ていたが国枝は沈黙を守り続けた。

坂本弁護士の一人っ子の龍彦はまだ1才だった。

龍彦の遺体が発見されるまで、龍彦の霊は長野県の山中で一人寂しく親を捜して彷徨っていたことだろう。

国枝の長女と同じ年で、生きていけば12歳になる。

3人の命日に必ず墓参りを欠かせないのは、後悔があったからだ。

小さな子供の命が犠牲になる事件を担当すると、胸が痛くなるのはこの時からだった。

犯人を追い詰めて必ずこの代償を払わせてやると改めて心に誓い、国枝はトイレのドアを押し会議室へ向かった。

現場検証 1

国枝が会議室に入ると、場内は捜査員や検死官チーム、所轄の警察官を含めた関係者で席は埋められていた。

正面には、警視正を中心に警視庁幹部が並び成城署の署長も緊張した面持ちで端席に座っていた。

国枝は遅れた事を詫びるように、正面列席者に礼をしながら席についた。

無駄話や囁き声が多くなってきた頃合を見て、警視正である捜査一課課長小林の第一声が場内に響きわたった。

「捜査員の諸君！今回の事件は年末年始を挟み、平和に暮らす住民にとって大きな衝撃となった殺人事件である」

「世田谷という地理的知名度も含め、ここ成城署管内に日本中が注目をしている」

「警視庁の威信にかけても、迅速なる解決と犯人逮捕に全力を尽くして欲しい」と30人以上の視線を浴びながら警視正の訓示が終わった。

会議室内は水を打ったように静寂が支配していた。

「では、これから国枝統括係長から事件の経緯と状況について発表してもらおう」と言って小林は国枝に目で合図した。

「小林警視正 ありがとうございます」マイクを持った国枝が頭を下げた。

そして統括係長という立場から、この事件の全容について説明を始めた。

ホワイトボードに被害者宅の見取り図、自宅周辺の地図、家族構成などが書かれた紙が貼られていた。

2000年12月30日 東京都世田谷区上祖師谷3丁目被害者である宮沢みきおさんの自宅内で何者かが一家4人を惨殺し逃亡を謀った。

第一被害者 宮沢みきお 44歳 会社員 ?東京C I企画勤務
死因は心臓・大動脈損傷による失血死。

第二被害者 宮沢泰子 41歳 公文学習塾を経営
死因は頭部及び頸部に複数回にわたる刺し傷による失血死。

第三被害者 宮沢にいな 8歳 小学校3年生
母親と同一死因

第四被害者 宮沢礼 6歳 小学校1年正
頸部圧迫による窒息死。

凶器は刃渡り21センチ、全長34センチの柳刃包丁及び被害者宅にあったと思われる文化包丁。

犯人は12月30日夜、11時20分頃被害者宅の2階浴室の窓から侵入。

浴室窓の網戸が外にはずれ落ちていた。

また、窓の真下の地面辺りから犯人の足跡が発見されている。

さらに浴室窓下の公園フェンス付近の木の枝も折れていた。

侵入後の足取りについては、現在解析中である。

1階の階段下で父親が失血性ショック死状態で発見。

2階の子供部屋で長男が絞殺体で発見。

2階の踊り場で妻と長女が失血死の状態で見。

被害者の胃の内容物などから、殺害の推定時刻は30日午後11時30分ごろとされている。

犯人は、4人を襲撃中に負傷したと見られる。

現場の救急箱が物色されており、犯人の指紋が付着した絆創膏、血痕が付着したタオルなどが台所に散乱していた。

生理由品で止血を試みるなど自ら治療をした形跡も残されている。

犯人の血液型はA型である。

屋根裏部屋の布団から母親と長女の血液が発見され、二人が就寝中に襲われた可能性がある。

母親と長女は、死後も執拗に何度も刺されている事が判った。

このような猟奇的な殺人は、犯人との怨恨がもとで犯行に及んだとも考えられる。

被害者の交友関係を徹底的に洗う必要がある。

次に、犯人は第一通報のある翌日朝10時55分の20分前まで現場に居たことが分かっている。

10時間以上もの間、犯行後に犯人は何をしていたのか、遺留品を含め検証を行う。

国枝は、オーバー・ヘッド・プロジェクター OHPの準備を部下に命じた。

会議室の窓のカーテンが閉められ薄暗くなった。

OHPの電源がONにされた。

現場検証2

プロジェクターに映し出されたのは、ペットボトルのお茶、メロン、アイス4個だった。

「犯人は犯行後、冷蔵庫にあったこれらの物を飲食していた形跡がある」と国枝がレーザーポインターで指し示しながら説明を始めた。

画像が切り替わって、浴槽の写真になった。

そこには破れた広告のチラシや書類、血の付着した生理用品とタオル、アイスのカップが散乱している。

「これらの書類は父親の仕事関係のもの、母親の塾の書類、広告チラシはハサミや手で引きちぎられている。生理用品とタオルは犯人が止血に利用したものである。また犯人は家の中を物色して不必要な物を浴槽に捨てたと考えられる」

画像が切り替わり、ソファを中心にリビングが写っている。

「2階の居間の模様である、見ても分かるようにソファの上にクレジットカード類が置かれ、その周辺には手帳や免許証などが仕分けされて整然と置かれている」

「キャッシュカードやクレジットカードの暗証番号を割り出そうとした形跡と思われる」

戸棚と机の写真が出た。

「ほとんどの引き出しが下から順番に開けられ物色された形跡がる、これは空き巣特有の手口でもある」

トイレの写真になる。

「被害者宅のトイレを使用し、トイレの中で被害者所有のバッグを物色した形跡がある」

パソコンが映し出された。

「犯人が1階の書斎にある被害者のパソコンを操作した可能性があり、マウスから犯人の指紋が検出されている」

「警視庁の指紋データベースと照合したが、該当なしとの結果だった」

続けて犯人の遺留品が映し出された。

「トレーナーである。2階の居間で綺麗に置まれている状態で発見されており、綿製のLサイズ、2000年8月製造のものである、全国で130着、都内では10着しか売られていなかったことが判明、販売者及び購入者の情報提供を呼びかけている」

「これはユニクロ製エアテックジャンパーで黒色Lサイズのもの。販売数は8万2000着あまりで通販、ネット販売でも売られる」

靴底の写真が変わる。

「犯人の足跡が発見されており、韓国のメーカーが4530足製造販売済みで、サイズは28センチまたは27.5センチである」

帽子とマフラーと防寒手袋が映し出される。

「これは防水性の帽子でブーニーハットと呼ばれる。アクリル100パーセントでサイズはフリー。国内で3465個販売済み。マフラーは緑地の赤と緑の模様が入っておりアクリル製、長さ130センチ。100円ショップでも売られている」

「手袋は防寒性のあるボア付きグローブと呼ばれるもので、黒い豚革性でサイズ26センチ、血液の反応がないため犯行時は使用しなかったと考えられる」

ヒップバッグの写真に移る。

「韓国製のもので、関東地区のデイスカント店で2850個販売され、このバッグも日本で販売された事が確認された。ベルトの長さは83センチに調整されている」

続けて国枝は言った。

「このバッグからは洗剤や砂などが検出されており、現在解析中である」

最後に凶器の写真が写し出された。

台所の流し台に並べて置かれる血痕のある2本の包丁。

「今回の事件で4人のうち3人を殺害した時の犯人の凶器を検証する」

「刃渡り21センチ、全長34センチ。一般的に刺身包丁と呼ばれ

るものである」

「刃こぼれが著しいため、犯人は被害者宅にあった文化包丁に切り替えて、犯行に及んでいた」

「小田急経堂駅近くのスーパーで1本、東急田園都市線用賀駅近くのスーパーでも2本、事件前日と当日に販売されている」

「また黒いハンカチが2階踊り場と台所で1枚ずつ発見されており、それらは包丁を包みヒップバッグへ隠すためと、犯行時ハンカチで固定して帰り血を防ぐために使用していたと解析された。もう一枚はマスク及びバンダナとして使用されたと考えられる」

そして窓のカーテンが開けられた。

急に明るくなり、捜査員たちは目を瞬かせながら、窓から国枝に視線を移した。

「補足として、被害者宅から被害者のトレーナーと現金が推定で15万円、2000年正月分の年賀状全てが盗まれていることが関係者の証言で判明している」

「では15分間の休憩を挟み、続いて通報者と周辺住民の証言に関して検証を行う」と言って国枝は、マイクとレーザーポインターを置いた。

警護

日下直樹は、夜勤明けで自宅に戻っていた。

年の暮れ30日午後、妻は朝から家の大掃除をしていたが、寝ている夫に気を使いなるべく音を立てないようにしていた。

子供達も外で遊ばせている。

午後3時を回った頃、日下の携帯電話が鳴った。

起きて新聞を見ていた日下は、着信を確かめて通話ボタンを押した。

「どうした？」と声を低くした。

「主任！三男の篤の姿を見失いました」焦った声の部下だった。

「どのくらい経つ？」

「2時間です」

「方々捜したのですが申し訳ありません 自転車で移動していると
思われます」

「最後に確認した場所は？」

「世田谷区三軒茶屋付近です」

「本人は携帯はもっているのか？」

「いいえ 自宅にあるのを確認しました GPS 追尾は無理です」
「そうか判った 引き続き捜索を頼む 俺もすぐに行く」と言って切った。

日下は直ぐに着替えを済ませ、SIG を手に取り腰のホルスターに挿した。

そして車に乗った。

妻が車のテールランプを見ながら心配そうに見送った。

日下は警視庁警備部警備課で要人警護を担当している。

機動隊特務班から転属して5年になっていた。

彼は運転しながら、何か嫌な予感がしてならなかった。

東京の空は、重たい雲で覆われ早くも薄暗くなりかかっている。

日下は、世田谷にある笹山国務大臣の邸宅を目指した。

一族

日下は街中を車で巡回しながら、笹山一族の事を考えていた。

笹山財閥は、大阪の造り酒屋の長男として生まれた祖父の笹山良市が築きあげた。

戦中戦後を通じて、日本の黒幕として絶大なる力を発揮し、人脈と財産を手に入れた。

良市の死後、彼の興した財団は三男に引き継がれ、ボートレースの収益金を使い政財界に今もなお影響力を持っている。

今日失踪した、篤は笹山良市の次男笹山崇あかしの三男であった。

笹山崇は自由党所属の衆院議員であり、第86代盛内閣の国務大臣を務めている。

日下は、セキュリティポリスとして警視庁から、笹山本人及び家族を警護するために派遣された警護員10人を取りまとめる主任警備官だった。

自宅の警備は24時間2人体制3交代で行い、残る4人は家族に密着して、外出時の警護にあたる。

失踪した三男の篤は、無職の19歳である。

16歳でアメリカに留学し、今年帰国したばかりであった。

この三男には各警護員が手を焼かされていた。

単独行動が多く、自由奔放で今回に限らず、度々姿を消すことがあった。

金銭的には何の不自由もない、六本木界限に出入りし、どうもドラッグに手を出しているようだった。

部下を常時張り付かせておいていたが、万引きや喧嘩を起こし、あと始末に四苦八苦する場面もあった。

警察内部から出向しているとはいえ、法を犯すのを見過ぎさなければならぬ事は決して本人の為にはならないが、我々の使命は要人関係者を外敵から守ることが最優先である。

部下の中には不満を漏らすものも出始めているが、多少のことは目をつむらなければならぬ。

警視庁上層部からの暗黙の命令でもあった。

日下は篤が人を危めるような事件を起こさないことを願っていた。

その時、携帯が鳴った。

「主任 篤の自転車を発見しました」部下の田中だった。

「どこだ」

「上祖師谷3丁目の児童公園の中です」

「いますぐ行く 待機していてくれ」と言って日下は電話を切った。
腕時計を見ると深夜の12時を回っていた。

また連絡が入った。

「大変です！主任・・・」と田中の慌てふためいた声だった。

犯行予告

国枝は休憩に入り、机の上にあるペットボトルのお茶に手を伸ばした。

ひと口、口をつけた時。

背後から声を掛けられた。

「国枝係長 ちょっとよろしいですか？」

彼が振り向くと警視庁特殊班電子犯罪係の井上悟だった。

井上は軽く礼をすると、国枝の側に寄った。

そして1枚のB5サイズのプリントを差し出した。

「これを見てください、今回の事件が発生する前にインターネットの掲示板に書き込みされたものです」

国枝はその用紙に目を通し始め、最初は軽い気持ちで読んだがもう一度最初から読み返し始めた。

目が真剣さを増し、紙を持つ手が震えているように見える。

内容は以下のものである。

2000年12月27日午後5時3分

俺は3歳のガキの頃から鼠を刺し殺し、又はては烏に与え、これを13歳に成った今でも続けている。其れと並行して犬も殺すことを7歳の頃に覚えた。最初に殺すのもあまり躊躇いは無かった事が鮮明に記憶に残っている。俺に突然噛み付きかかって来た体長約60cmの少し大き目の犬だった。一発蹴るとまだ噛み付きかかって来やがるので、俺は犬の腹を引き続き蹴った。何発蹴ったのか覚えていない。死んだ時には其の犬は口から大量の血を流し、腹からは内臓が少し食み出していた。勿論今でも此れは野良犬を見掛けるとやるいまでは蹴る力も倍増し、手でバラバラにする事さえ躊躇わないようになった。悪臭がするがそんなこと気に為ない。猫にも時々同様のことをやる。猫を顔を含め包帯でぐるぐる巻きにした上で、内臓を切り裂いて取り出し、道路に放り出して置く。すると烏が啜えて持つて行ってしまうか、自動車に引かれて余計に悲惨な光景に成るが、其れがまた快感だ。友達とどちらの結果に転がり込むか賭けをしたことさえある。最近では人間を切り裂いて内臓を見たいとも考える。あの歌舞伎町で起きたビデオ屋爆破事件の容疑者の少年が供述していたように。今では隣の幸せそうな家族を見るとあの大分一家殺傷事件のようにしてしまいたいとも思う。決行日は12月31日午後11時59分だ。21世紀がやって来る前にちゃっっちゃと殺つてしまおうか考えている。

国枝が読み終わるのを待つて、井上は語り始めた。

「インターネットの掲示板は、不特定多数の人間が参加できます。特にこのサイトは2チャンネル掲示板といひまして日本では最大規模のものです。登録制ではありませんので無記名または偽名で書き込まれます、書き込み者の特定はほぼ不可能です」

「この内容から見ますと、今回の世田谷一家殺人事件の犯行予告とも取れる文面です。最近、世田谷区内の公園で小動物の虐待が散見

されてきました。もちろん同一犯人かは不明ですが捜査の資料として提出させて頂きます」

「どうもありがとうございます さっそく捜査資料として担当に回しておきます」と国枝は井上に握手を求めた。

「また何か、情報が出ましたら私に連絡してください」と言って国枝は携帯の番号を井上と交換した。

その時、会議室の中に、休憩を終えた捜査員たちが戻り始めた。

修羅場

「落ち着くんだ 何が起こったんだ 田中君？」と焦る相手を落ち着かせるように日下は言った。

「笹山篤が人を殺しました それも4人です」声が震えていた。

「何・・・」日下は遂に来る時が来たと思った。

「私が現場に着くまで笹山を確保しておくんだ 分かったな！」

「はい 早く来て下さい お願いします 現場は上祖師谷3丁目の児童公園隣接する住宅です、家人の名前は、宮沢みきおと云います」

「分かった」日下は電話を切り、車のルーフに赤色回転灯を付けサイレンを鳴らした。

現場へは10分で着くだろうと判断した。

周辺の住民に気付かれないように、到着前に赤色回転灯とサイレンを消した。

だがその場所は住宅も少なく、大きな公園に面しこの真冬の夜中では出歩く人影は皆無と行って良いほど閑散としていた。

街灯も少なく、ある意味物騒極まりない地域だと日下は思った。

速度を落としゆっくりと犯行現場に迫った。

目指す住宅はすぐに目に付いた。

裏の公園脇の路上に一台の黒塗りの車が止まっており、警視庁の覆面パトカーであることが分かった。

日下は電話を取り田中に連絡を入れた。

「はい 表玄関を開けますので来て下さい」

「分かった 生存者はいないのだな 今から行く」日下は電話を持ったまま玄関に向かった。

玄関の扉が開き、田中が蒼白な顔を出した。

日下は中に入り、靴を脱ぎ揃えた踵を綿手袋を付けた左手で持った。薄明かりの中、階段下で血だらけで死んでいる無残な男の死体を見つけた。

現行犯

笹山篤は、1階書斎部屋のソファーに静かに座っていた。

日下は、2階の3体の死体を確認し降りてきた。

篤を見た日下は、手錠を嵌めている彼の姿を見るや顔面を思いっきり殴った。

彼はソファーごと後ろに弾け跳んで行った。

倒れた篤は日下を見て、殺意を露わに睨んでいる。

後ろに回った日下は、さらに篤の腹部を蹴り上げた。

「主任！それ以上はやばいですよ」と田中は言って日下を背後から押さえた。

田中はソファーを戻し、篤を座らせた。

そしてここまでの経緯を語り始めた。

「笹山篤が居なくなっただのは、今日の午後1時頃でした。」

「自転車で遊びに出るところを尾行しました、彼はスケートボードを持っていました」

「三軒茶屋のボードショップに入り、いつになっても出て来ないため店を覗くと姿はありませんでした」

「多分裏口から逃げたのでしょう。その後、彼がよく行くスケートボードが出来る公園やインドアの練習場を訪ねました」

「7時頃いったん笹山邸に戻り、夜9時まで家の前で待っていました」

「そして最後に、ここの祖師谷公園のハーフパイプのある練習場に来たのです」

「もう夜の11時を回っていましたが、夜間照明があるので、もしかしたらと思いました」

「11時30分頃、たまたまこの家の裏の公園のトイレに寄りました。」

その時、こいつの自転車が隠してあるのを発見したのです。

周囲を探すと、奴がこの家の2階の窓から侵入する所だったんです。空き巣でもするのかと思っただので、しばらく様子を見ていました。

すると中から誰かと争う物音が聞こえました。

家人に見つかつたかと思ひ、私は玄関に向かいました。

呼び鈴を鳴らしても応答が無く、胸騒ぎを覚えました。

シンダー錠を持っていた道具で開け、中に侵入しました。」

「そして2階で女の子を刺しているこいつを見つけました。」

直ぐに取り押さえましたが、抵抗したので2階からこいつを投げ飛ばしました。

大した怪我はしていないようですが、大人しくなりました。」

「それで直ぐに主任に電話したと言つ訳です」と田中は堰をきつたように説明した。

「何故こんな事をしでかしたんだ」と日下は篤に向かって詰問した。

「……」返事が無い。

「死刑になるぞ いいんだな」と日下が脅した。

「親父がなんとかするさ」と口から血を流しながら薄ら笑いを浮かべる。

日下と田中は目を見合わせた。

そして日下は、直属の上司に連絡するため携帯を取った。

証言者

「全員揃いましたでしょうか？では事件に関する各証言について検証します」と言いながら国枝がプロジェクターの電源を入れた。

「まず犯行現場の第一発見者の証言です」

プロジェクターの画面は、泰子の実母である三枝浅子の顔写真を映し出した。

証言者の三枝浅子は被害者宮沢泰子の実母である。

被害者宅に隣接する一戸建てに、泰子の姉夫婦と同居している。

三枝浅子の証言。

30日午後6時頃、娘の泰子と正月料理について電話で話をした。その後、娘のいなが調味料を借りに来ていた。

午後10時に就寝。

その後は翌朝6時に起きるまで宮沢宅の異変に気付かなかった。

31日朝9時に宮沢宅に電話を架けるが応答が無いため寝ていると思う。

朝10時になり直接宮沢宅を訪れるが、鍵がかかっており声を掛けても応答なし。

5分後預かっていた合鍵を使い、玄関から入室する。

すぐに1階階段下に宮沢みきおの遺体を発見。

その後2階の踊り場で泰子と長女にいな遺体を発見する。

まだ息があるかを触診した。浅子は元看護師であった。

その時、泰子の義兄である西村芳雄が入室する。

二人で長男礼の姿を捜し部屋に入る。
そしてベッドの上で、横たわる長男を発見。

第2発見者 泰子の義兄 西村芳雄の証言

義母の浅子が心配するので、着替えを済ませ、浅子の後を追い宮沢宅を訪れる。

1階階段下に宮沢みきおの遺体を発見。

2階の踊り場で母浅子が二人の遺体にすがり泣いているところだった。

その後、二人で長男の姿を捜しに2階の子供部屋に入室した。

長男の死亡を確認してから、自分の携帯電話で110番通報をする。

30日午後11時30分頃、被害者宅から「ドスン」という大きな物音がするのを聞く。

事件発覚時、1階の電気はついていた。

西村杏子 泰子の実姉 西村芳雄の妻

ベニヤ板をひっくり返すような音を聞いた以外に、31日午前1時すぎ就寝するが特に異変を感じなかった。

近所の証言

被害者宅の道路を隔てた、正面の一戸建て住宅の住人の証言。

30日午後11時前後に被害者宅から争うような声がしたのを聞く。

通行人Aの証言

30日深夜、被害者宅で男女が口論する声を聞いていた。

「目撃証言や関連証言が大変少ないのは、この地域が都立祖師谷公園の拡張工事の区域に該当し、殆どの住民が転居していた為で、付近は被害者宅を含め4軒が残されるのみであった」と国枝が説明した。

「補足として被害者宅近くにはスケートボードが出来る広場があり、夜に滑るなどルール違反をするスケートボーダーと被害者宅との間で揉め事になっていたという目撃証言もある。また現場周辺では2000年夏以降、小動物の虐待事件が数件起きていた。事件直前の12月中旬にも1件、野良猫の不審な屍骸が発見されている」

「未だに単独犯か複数犯かも特定できず捜査は難航している、どんな些細なことでも構わないので半径1キロ圏内の聞き込みを重点に情報の収集を再度始めて欲しい」

「また、容疑者のプロファイリングを行っているので紹介する」

被疑者は10代から20代中頃、長髪で犯罪嗜好癖あり。

逃亡はおそらく幼稚なもので、国外に逃げたという可能性は低い。いまだ国内に潜伏しているか、自己の犯罪達成を完結させるため自殺した可能性あり。

出身は北部近辺で、現場周辺に土地勘がない男。

残忍かつ冷酷だが目的意識はさほどなく、金銭目的というより犯罪嗜好概念による動機が強い。

と、プロジェクターの画面にまとめられていた。

「韓国製の衣料品が多く見つかっており、在日韓国人、朝鮮人の可能性も視野に入れて欲しい。」と国枝は締めくくった。

「質問はありませんか？」

一人の捜査官が手を挙げた。

「根拠の無い話ですが、無理心中という可能性はありませんか？」

「……」国枝は一瞬黙ったが、「犯人の血液が発見されている、家族は全員がB型であり、凶器から犯人のものとみられるA型の血液が採取された」言った。

「さらにDNA鑑定の結果が待たれている状況だ」

「他に質問が無ければ終了します。ご苦労さまでした」と言っ
て机に国枝はマイクを置いた。

始末屋

日下は、上司の早川へ電話をした。

「警視ですか 日下です、笹山篤が世田谷で家族4人を殺害しました」

「はい、今現場にきています、本人の身柄も拘束しています」

「今のところ目撃者はいない様です」

「田中正明警護官が発見し、連絡を受けて私もたつた今駆けつけました」

日下は、状況についての的確に上司の早川警視に説明した。

「分かりました、連絡をお待ちしています」 と言って携帯電話を切った。

間もなく日下の携帯が鳴った。

「日下です」

日下は、しばらく相手の話を黙って聞いていた。

「しかし・・・」 日下は信じられないというような顔をした。

「分かりました 失礼します」 日下は電話を切った。

「どうしますか？」と難しい顔で篤を見つめる日下に田中が聞いた。

「すぐここを、笹山を連れて撤収せよとの命令だ」

「え！・・・」田中は驚いた。

「すぐに現場処理班が到着するそうだが、全て彼等に一任するよう指示された」と日下は言った。

「笹山を逃がせということですか？主任」と言いながら、田中は笹山と日下を交互に見た。

笹山の顔が、（ざまあみろ）と言っている。

「とにかく君は、笹山を車に乗せて笹山邸へ戻ってくれ」

「俺は現場処理班が到着するのを確認してから警視庁に行く」と日下が言った。

「分かりました 主任」と言って田中は、笹山を連れて玄関から出て行った。

二人が出るとき日下が声を掛けた。

「見られないように注意しろ」

田中が頷く。

玄関が閉まった。

1時間後、日下の携帯が鳴った。

「日下さんだね、早川さんから頼まれた現場処理班の者だ」男の声だった。

「分かった 今玄関を開ける」と言っただアを中から開けた。

二人の男が黒いレインスーツ姿で立っていた。

手には中型の黒いスーツケースが握られている。

「ご苦労様です、後は我々が片付けますからお引き取りください」とドスの効いた声が眼鏡をかけた年配の男から発せられた。

二人共ひと目で裏稼業の人間であることが分かった。

(まさか一家をまるごとクリーニングする気なのか) 日下は思った。

若い方の男が、1階階段下の死体にすばやく向かった。

歩くというよりも滑るような動き方だった。

薄いブルーのニトリル手袋をはめ、靴にもカバーが付いていた。

「あんた 興味があるのかい 悪い趣味だね」と笑った、度のきつい眼鏡を通した目は蛇の目のように冷酷さを漂わせている。

「いや、すぐに出て行く」と言っただアノブに手を掛けた。

日下は、車に戻ると振り返って家を見た。

無残な母親と娘の姿が目には焼き付いている。

自分の吐く息が白く広がり、上空は漆黒の闇だった。

日下は、腰のホルスターから銃を抜いた。

偽装工作

「日下君 その銃を仕舞いたまえ」と背後から声がした。

不意をつかれた日下は、振り返りざま片手で銃を突きつけた。

早川警視だった。

「申し訳ありません 失礼しました」と言っただけで日下は慌てて銃を下ろした。

「何をそんなにピリピリしているんだ」と早川が問いかける。

「いえ……」日下は返答に窮した。

「確かに笹山が犯した罪は取り返しのつかない事だ」

「犠牲になった家族も浮かばれないことだろう」

「だがこの事実を公表することは出来ない、闇に葬りさらなければならぬのだ」

「君には理解できないだろうが、今政局が混迷を極めている、盛内閣の内閣改造が整ったばかりだし、このスキャンダルがどれほどの影響を及ぼすか想像できるかね？」と早川は言った。

「……」日下は押し黙っていた。

「父親の笹山崇は将来の総理候補なのだ」

「犯人の逮捕は、警視庁上層部も望んでいない」

「これは命令と捉えても構わない」

「君の将来と家族にも関わることだ」と早川は言う。

「警視 それは脅しですか」と日下が反抗的に言った。

早川はそれには無視して話を続けた。

「遺体には手を出さないように伝えている、明日には発見されるだろう」

「笹山篤に結びつかないように現場の状況を偽装し、最終的に未解決事件となるように捜査を攪乱させる、その為にはわざわざ彼らを呼んだのだ」

「君も犠牲者と同じ年頃の女の子がいたはずだね、私にも双子の小学生在がいる」

「君の気持ちもよく分かる」

「篤は、笹山家から出家させる予定だ、議員からも了解を得ている」

「議員の後ろ盾でもある宗教団体に内密に頼んでおいた」

「もう篤は、自由に娑婆を歩くことは出来ないだろう」

「君には、引き続き笹山大臣の警護を頼みたいが出来るかね？」

「警視 納得は出来かねますが今回だけは指示に従います、ですが篤がまた同じ過ちを繰り返そうとした時は、私は容赦しません」と

日下は射すような目を早川に向けて言った。

「分かった その時は君の好きにしたまえ、お陰で私の顔も立つというもんだ」早川は、ほっと安堵のため息をついた。

「今日は非番じゃないのか、帰ってゆっくり休みたまえ」と言つて、早川は闇の中に消えて行った。

日下は田中に連絡を取り、無事に篤を送り届けたことを確認した。

そして早川の話をかいつまんで田中に話をした、今後は絶対に篤から目を離さないようにと注意を促した。

田中は納得がいかない様子だったが、組織から謀殺されかねない事を感じたのか、騒ぎ立てないことの方が得策と思ったようだった。

日下は飲食店街を目指した、飲まずにはいられない夜になった。

時計は、午前1時を回っていた。

切裂魔

2月12日夜、練馬区大泉学園町

コンビニへの道を自転車で急ぐ少女がいた。

綾は15歳で、勉強中にシャープペンスルの芯が切れたためコンビニへ買いに出たのである。

クラスの副委員長をつとめ、演劇部と美術部をかけもちする真面目な生徒であった。

コンビニからの帰り、人気の無い裏通りを綾は自転車で家路を急いでいた。

その時、背後から車のヘッドライトが迫ってきた。

綾は自転車を道路脇に寄せ、通り過ぎるのを待っていようと思った。

しかし、振り返った綾は眩しさのため手で目を覆った途端に車に追突された。

綾は軽く跳ね飛ばされる形で転び、膝に擦過傷を負う。

車から降りてきた若い男は、慌てた様子で「大丈夫ですか？」と声を掛けてきた。

シヨックのあまり返事が出来ない綾を抱き起こして、男は彼女を救急病院へ連れていき手当てを受けさせた。

看護士に事情を聞かれていたが、男はうまく誤魔化したようだった。綾は大した怪我でもないので、騒ぎ立てないようにした。

それに直ぐに病院に連れてきてくれたのにも好感がもて、その男の容貌も若手タレントに似ていたこともあった。

「たいした事なくて良かった」と安堵の溜息を漏らす男だった。

「ごめんね CDを入れ替えていて気がつかなかったんだ」と男は頭を掻いた。

「もう大丈夫ですから」と綾は笑顔で返した。

「このまま家まで送るから、ご両親にもお詫びしなければいけないし」と男は車を病院正面玄関に回すと言って先に出て行った。

綾は男の運転する車の助手席に乗り包帯が巻かれた右膝をさすった。自転車も後ろのトランクに積んであった。

しばらく走っていたが、家へ帰る方向と違う道を進み始めた。

「あの・・・こっちじゃないんですけど」と綾は男を見た。

しかし突如男は豹変し、綾に向かって左手でナイフを突きつけてきたのである。

頬を切られて怯える綾を男は車の中で、2度犯した。

男の名は笹山篤。

1週間前、出家し統一教団に入信していたが薬物の禁断症状と復讐の念で教団の建物から逃げ出していた。

綾から電話番号を聞き出し、架けた電話には誰も出なかったため、男はてつきり家は無人だと思い込んでいた。

綾を連れ、家の中に入っていった。

だが、実際には綾の祖母が留守番をしていたのである。

男は祖母に向かつて、「通帳を出せ」と凄んだが、彼女は怯えた様子もなく自分の財布から8万円を抜き出し、これをやるから帰れ、と言った。

馬鹿にされた、と思い男はカツとなった。

さらに脅しつけたが老女がひるまず警察に通報しようとしたため、男は激昂し彼女をこたつの電気コードで絞殺する。

死体を横に、さらに金品を漁っていると、午後7時頃に母親が帰宅してきた。

男は母親を包丁で刺殺する。

そして床に広がった血と尿を、綾にタオルで拭き清めることを命じた。

目の前で母親を殺され、放心状態の綾は男に従うしかなかった。

玄関のブザーが鳴った。

びくつとした男は、綾に出るように指示した。

玄関に入って来たのは、保母に連れられた綾の妹だった。

綾が出迎えたため、保母は特に不信感を持たなかったようである。

「ばいばい」と言って妹は見送った。

男は綾に夕食を作るよう命令した。

「お兄ちゃんは誰？」と不思議そうに妹が綾に尋ねる。

「・・・」綾は返す言葉が無かった。

夕食後、まだわずか4歳の妹は絞殺された祖母の死体が転がる部屋へ、TVを観ていると男に追いやられる。

それから男は、「気分転換しよう」とまた綾を茶の間で犯し始めた。

翌朝、目を覚ました4歳の妹が泣いていた。

泣き声に腹を立てた男はその体を掴み、背中から包丁を突き入れ胸にまで貫通させた。

「いたい、いたい」と幼い妹が細い泣き声をあげる。

男は綾に向かって「楽にさせてやれ」と言ったが、綾はどうする事も出来ない。

「キヤー」嬌声を発した綾は、男に向かって行った。

恐怖の頂点にいた綾は、わずか4つの妹を殺されて糸が切れたようになり、そのとき初めて笹山に歯向かった。

男は綾にも包丁をふるい、左腕と背中を切りつける。

その時、玄関から大勢の靴音が聞こえ始めた。

「誰だ!？」と振り返った男が見たものは、白装束の教団の男達だった。

男達は、笹山を取り囲んだ。

「もうよせ! 笹山 すぐに我々とここを出るんだ」とリーダーの男が言った。

笹山はその男に向かって、包丁を突き出したが、背後から後頭部を殴られ混沌した。

そのまま、数人の男達に引き摺られるように笹山は玄関から出て行った。

リーダーの男は、綾に目を向けたが綾はもう虫の息であった。

男は合掌した。

そして踵をかえし、玄関から薄明るくなった外に出た。

玄関前の大型のワゴン車に乗る時、もう一度家の門を見た。

表札の名前が目に入った。

「日下直樹」

悔恨

警官隊が雪崩れ込んだ時、家の中で血だらけで横たわる少女を発見した。

傍らには少女の母、祖母、妹がものいわぬ死体となつて転がっていた。

若い警官の中には、顔面蒼白で呆然と立ち尽くす者があれば嘔吐する者もいた。

少女は微かに生命反応があり、救急隊が呼ばれ病院に運ばれた。

そこは昨夜、綾が手当てを受けたところでもあった。

救急救命室に運ばれ緊急手術が施されたが綾は息を吹き返すことは無かった。

日下が到着した時には、家族と一緒に霊安室に移されていたのである。

家族の亡骸を見つめていた日下直樹は、自分の犯した罪への報いだと思つた。

不思議と涙は出ず、五臓の奥深くから沸き起こる怒りの血しぶきが全身を駆け巡っているのを感じていた。

悲壮感漂う彼の姿に、声を掛ける者は誰もいなかった。

検死解剖が終わり、彼女たちは茶毘にふされた。

葬式は警視庁管内から警察署関係者、学校関係者を含め3000人以上の弔問者が列席し、しめやかに通夜が執り行われた。

その中には、国松警察庁長官、早川警視や国枝大輔、笹山崇の姿もあった。

日下の無表情な顔には、誰も驚きを隠せない様子である。

刑事達の勤なのか、精神錯乱手前の鬼気迫る雰囲気を感じているようだった。

喪主の挨拶が始まった。

「妻も母も子供たちもこの世の中で私の愛するものの全てでした」

会葬者の中からすすり泣きの声があがる。

「こうなったのも全てわたくしの犯した過ちの結果なのです」

場内が一瞬静寂に包まれた。

「家族を守ってやれなかった事が悔いても悔いきれません」

「家族を守れない者が国民の安全を確保することが可能でしょうか？」

「今私の心は揺れ動いています」

「何を為すべきか」

「どうしたら犠牲となった者たちの非業の死に報いられるのか」

「ただ私は犯人を許す事は出来ません、必ずこの子らの墓前に膝まつかせてやります」

「必ず……」

沈黙

慌てて葬儀委員長がマイクを引き取った。

「ええ このたびは皆様におかれましてはお忙しい中……」とお決まりの挨拶で通夜の義を終えたのであった。

式場を去るとき国枝は見送りに出た日下にお悔やみを言いながらも、先程の日下の言葉に引っかかるものを感じていた。

訪問者

世田谷事件発生から3ヶ月近く経過しながら犯人の手掛かりが掴めず捜査は難航していた。

新聞紙上では、数ヶ月の間に起きた連続一家惨殺事件について連日一面を割いて報道していた。

DNAの鑑定結果は、世田谷で発見された犯人の血と練馬の事件で少女を強姦した犯人の体液とは類似性が無いとされた。

血液型も相違していたと報じられた。

その後、警視庁の見解も犯人は別人であると発表したのである。

日下は一週間の忌引休暇を申請していた。

告別式が終わり、親類縁者も帰った今、日下は家の中で一人4つの遺影の前に抜け殻のように座っていた。

その時、携帯が鳴った。

「田中です、今大丈夫ですか」部下の田中正明だった。

「俺一人だがどうした？」田中のただならぬ声に日下は我に返った。

「主任 実は今、彩さんが運び込まれた救急病院に来ています」と田中は言った。

「私の警察学校時代の友人が練馬署にいて情報を流してくれたので
す」

「彩さんは殺される前日にも、この救急病院に来ていました」

「何！それは本当か？」

「いいですか、その時男と一緒にだったと云うんです」

「誰だその男は？」

「その時いた看護師の話を聞きました、彩さんはひき逃げに遭った
のでその男が助けて病院に連れてきたそうなんです」

「治療費も払ったそうです」

「・・・」

「主任 僕は笹山篤の写真を見せました」

「看護師は髪型は違うが間違いなくこの人だと言ったのですよ」

「奴です 主任 ご家族を殺したのは笹山篤です」

日下の握った携帯がぶるぶると震え出した。

「主任 大丈夫ですか？」

「ああ よくやってくれた」と搾り出すように日下は応えた。

「僕はこれから奴の居場所を探ってきます、判ったらすぐに連絡します」と言つて田中は電話を切つた。

玄関のブザーが鳴つた。

日下は自分の書齋に走り、銃を掴んだ。

そして玄関の扉の内側から声を掛けた。

「どちらさまですか？」

やや間があつて、訪問者は言つた。

「夜分すみません 警視庁の国枝です」

日下は銃を背中のベルトへ挿してからカーディガンを羽織つた。

扉の錠を解除し、ドアを開けた。

そこに立っていたのは、見覚えのある国枝大輔の姿だった。

カルト教団

統一教団は、日本では1959年10月2日に創立され、1964年7月15日に宗教法人として認可された。

笹山良市も（全国モーターボート競走会連合会 後の「日本船舶振興会」の会長）：1960年に密入国で逮捕された西川勝（韓国名、崔奉春 東京教会の設立者）の身元引受人を買って出た。

日本の本部は渋谷区松涛にあり、公認教会（教会が建物を買った所有する教会）数は日本全国で103（2006年8月現在）ある。

任意教会（教会が建物を借りている教会）も多数存在する。

教団は「世界190余ヶ国に宣教師を送り、150万名の信者がいる」と云われる。

過去の年代における信徒数については、（1995年）12月31日現在の文化庁統計によれば、日本の信徒数は47万7000人。

韓国には日本から韓国人との祝福（結婚）等で韓国にきた人だけでも5000人、統一教会の歴史は韓国が一番長く、統一教団信者の子女だけでも10万人は下回らない。

韓国全体で数十万人にはなると思われる。

アメリカにも一万人はいると言われている。

教団はすべての宗教の統一を目指しており、それに向けて他の宗教

や教団に対して働きかけてきた。

また表の活動とは別に「教団復帰」と言って、他の教団に信者を潜り込ませ、そのトップや幹部を自分達の教団の方針に沿うように働きかけた。

教団は信者に対するお布施の強要と強引な靈感商法により膨大な資金を集めている。

またオウム真理教に統一教団の信者が大量に移り、統一教団からオウムに50億円もの活動資金が流れていたともいわれる。

この資金の出所が創家学会ではないかとの憶測が流れていた。

創家学会の長年の用心棒として知られる山口組系後藤組が、北朝鮮から輸入した覚せい剤を扱い、創家学会がその収益のマネーロンダリングにあたっていると云われる。

さらに宗教法人の財務の閉鎖性を米CIAも利用した。

元CIA長官だった米大統領ブッシュが、統一教団の文鮮明（創始者）と深い関係にあり、米CIAは、出先機関としてのKCIA（韓国中央情報局）の局長に金鐘泌を抜擢させた。

金がKCIAの部長であった際、統一教団を組織化し、この教会を政治的に利用することを考えたのである。

一方で、創家学会は笹山一派を通じて統一教団と繋がりがあり、そ

れ以前に創価内部に深く入り込んでいる暴力団、後藤組のもつ北朝鮮コネクションからオウムの麻薬ビジネスに関わっていた。

そして、CIAお得意の麻薬ビジネスの日本支部がオウムだったわけ、その収益が北朝鮮に還元されていたのも当然のことであり、北の現体制を維持するための、CIAの有難い配慮だったわけである。

なにしろ北の体制が崩壊すると、困るのはCIAのスポンサーである軍産複合体と国際金融資本であり、極東の緊張は彼らの利権に大きく影響することは間違いないからである。

疑問

部屋の中に招かれた国枝は、何か落ち着かない日下の態度が気になった。

国枝は、4人の霊前に焼香を済ませて振り返った。

日下がお茶を用意してテーブルに運んで来た。

「日下さん お構いなく」

「いえ 告別式にも参列された上、今日はわざわざ来て頂いて有難う御座います」

「私も世田谷事件を追っているものですから、何か人ごととは思えなくて・・・」と言いながら国枝はお茶に手を伸ばした。

「犯人の目星はついたんですか 国枝さん」と日下が探るような目をした。

「ここだけの話ですが、犯人の残した物的証拠が多すぎて、逆に捜査が混乱している状況なのです」

「あれだけ遺留品があれば、通常は短期決着のはずなんだが」と国枝は日下の顔を見て言った。

「・・・」日下は何かを考えているような顔つきだった。

「ところで日下さん 先日のお通夜の時にちょっと気になることがあって、お葬式が終わって落ち着かれた頃にお邪魔しようと思って

いたんです」

「それは いったい何でしょうか？」 日下は怪訝な顔をした。

「実は日下さんの挨拶の時に言っていた言葉なんですが、日下さんは実行犯が誰か知っているような口ぶりに聞こえたので、もし違っていたら謝ります」

「世田谷の事件とご家族の事件との関連は否定されているが、私はどう考えても殺害の手口から同一犯の仕業としか思えない」と茶碗を握りしめながら国枝が言う。

「・・・」 日下は黙ったまま悩んでいるような目つきをした。

「何か知っていることがあれば教えて欲しい、もしかしたら世田谷の解決の糸口になるかもしれない」と訴えかけるように国枝が言った。

そして日下はその重い口を開いた。

「何も知りません、出来る事なら私も犯人をこの手で探し出したいくらいです」

「だが担当違いでもありますし、今の任務を疎かにする事も出来ません」

「国枝さんもお忙しいと思いますが、是非わたしに代わって犯人逮捕に当たってください、私で出来ることがありますたら何でもご協力させていただきます」

期待していただけに国枝の落胆は傍目から見ても分かった。

「そうですね、やはり私の思い過ぎでしたか 大変失礼な事を言

ってしまったようだ」と国枝は頭を下げた。

「いや 気になさらないで 国枝さんのお気持ちも分かります」日下は言った。

「疲れているのに突然お邪魔して申し訳なかった もう一度お線香を上げさせてもらって帰ります」と国枝は、また霊前に向かった。

その後姿を見ていた日下は深深と国枝に頭を下げた。

玄関で見送っていた日下に、国枝は声を掛けた。

「私を必要とした時があれば、いつでも携帯に電話して欲しい 必ず力になるから」と言って日下に名刺を渡した。

「では ここで失礼します お茶をご馳走様でした」と言って国枝は車に乗った。

「お心遣い本当に有難う御座います」

車のテールランプを見ながら日下は、打ち明ければよかったと後悔した。

その時携帯が鳴り、着信は田中からだった。

宣戦布告

田中は、笹山篤が籍を置く統一教団の世田谷教会の内偵を始めた。

世田谷教会は東急田園都市線・三軒茶屋駅と駒澤大学駅の間に位置し、国道246号線沿いにあり、三軒茶屋を中心として活動する教会であった。

しかし、笹山篤はつい最近大阪の支部教会に移ったという事が分かった。

「主任、田中です たった今笹山篤が2日前に大阪に飛んだことが判明しました」

「笹山の実家に確認したのですが、母親も知らないようでした」「どうやら教団がらみで篤の所在を隠蔽しようとしているようです」

大阪府警に問い合わせると言い、もう少し世田谷教団の内偵を試みたいと田中は携帯を切った。

田中の持ち前の正義感と世田谷一家殺害黙認の負い目のせいで、彼は獲物を追う狩人となっていた。

後から日下は田中に対し、（無理をしないように）と声を掛けておけばと後悔した。

その不安が当たり、田中正明の声を聞くのはこれが最後となったのである。

翌朝、田中の車が東京湾の海底から発見され引き上げられた。

田中は外傷もなく検死の結果、溺死と鑑定された。

目撃者の証言もあり、運転操作の誤りで落ちたものと処理された。

日下は、死体安置所の田中の遺体に向かい号泣した。

自分の家族が殺されても泣かなかった男が、堰を切ったようにその場に泣き崩れた。

翌日、日下は辞表を手に警視庁に登庁した。

日下は早川警視のオフィスを訪れた、アポイントも取らずに現れた彼を秘書が制した。

日下は構わず早川の部屋のドアを押し開けた。

そこには、来客に应对中の早川がいた。

日下は入るなり、立ち上がった早川の胸倉を掴まえて声を荒げた。

「何故 田中を嵌めたんだ！」

訪問客は慌てて部屋から出て行き、秘書が人を呼びましょうかと早川に聞く。

「いや 大丈夫だ 二人だけにしてくれ」

いぶかしむ秘書は黙って出て行った。

「まあ 落ち着け 日下君」と言いながら日下の腕を振り払った。

「田中君のことは大変残念な事をした」ネクタイを直しながら早川が言う。

「とぼけた事を云うな 貴様たちが田中を殺したんだろ」日下は齒軋りをさせながら吼えた。

「違う 私は何も関わっていない 信じてくれ」

「身内を庇う事はしても殺すことはしない」と言うのが目線を合わさうとしない。

日下は上着のポケットから、辞表を取り出し早川へ叩き付けた。

「なんの真似だ、お前も死にたいのか」と早川が口走った。

その時、日下は早川の顔面に強烈な右フックを叩きこんだ。

彼はその場に転倒し泡を吹き、脳震盪を起こしたようだった。

秘書がドアを開け、顔を覗かせた。

「・・・」呆気にとられたが、日下の形相を見て慌ててドアを閉めた。

早川の体を探り、携帯を探し出した。

送信履歴を確認し、統一SSという番号を押した。

「桜庭です どうしました早川さん？」

「……………」

「早川さんでは？」

「笹山篤は必ず捕まえる 必ず復讐を果たす 邪魔する奴は殺す」
感情を押し殺し日下は言った。

「おい……」相手の言葉の途中で携帯を日下は切った。

外で人の気配がし、騒々しくなってきた。

日下は2階の窓から外へ飛び降りた。

芝生の上に落ち、ビルの日陰に紛れてその場から消え去った。

銀総会総長

日下はその夜、銀座にいた。

銀総会総長に会つたためだった。

クラブのボックス席でホステスに囲まれてその男は待っていた。

ひと目で上得意客と分かる店側の対応だった。

「日下さん、久しぶりでしたね。ご家族のことは知っています」と
言いながら女の子に席を空けさせ日下を座らせた。

「ママ悪いけど皆を席から外させてくれ、内輪の話になるから」と
と日下の酒を作らせてからホステス全員を遠ざけた。

「突然連絡して悪かったな。総長」と日下はグラスに口をつけてか
ら言った。

銀総会とは、日本初のマフィアとして誕生した闇組織だった。

その3000人を上回る構成員と云われる組織のトップが総長と呼
ばれるこの男だった。

まだ20代の若さだった。

ヤクザが恐れる闇の集団、狂犬とよばれた男。

全てが桁外れで怖いもの知らずの小柄な若者だった。

日下との出会いは2年前、やはり銀座のクラブであった。

日下はボディガードとして、夜の銀座を楽しむ警視總監に同行していた。

深夜になり、ホステスとアフターを楽しむからと總監が席を立った。

「ご苦労 私は先に帰るが君はもう少し飲んでいきなさい」と言って總監はタクシーにホステスと乗り込む。

テールライトを見送り、日下はクラブに戻った。

久々に羽目を外して飲もうと思ったのである、明日は非番だった。

中に入ると先程と店の雰囲気が変わっていた。

一人の男が数人の男達に囲まれ一触即発の状態だった。

年配の男がブランデーのボトルをテーブルに叩き付け凶器にした。

囲まれている若い男は、怯みもせず「外に出ろ」とドスの効いた声を発した。

入り口にいる日下は、脇を通る男達が出て行くのを横目で見ていた。

1対5 どの顔を見ても堅気の間人ではないのが分かる。

日下は5人の内の一人の男が腰にチャカを忍ばせているのを見抜いた。

ほっと安堵の溜息を漏らす若いホステスに日下は聞いた。

「彼らは何を揉めているんだい 何かあったの？」

「酔っ払った稲川会の組長が女の子に絡んだの、そしたら見かねたサブロウさんが止めに入ったというわけなんです」

（あの若い男は、サブロウと言うらしい）辰吉丈一郎に似ていると思っただ。

「お客様は刑事さんでしたよね お願いサブロウさんを助けてあげてください」

「チーちゃん 余計なことを言わないの」とママが口を挟んだ。

「たまに有る事ですからお気になさらないでくださいね」とママが言う。

「さあ 飲み直しましょ！ね」

少し考えた日下は、「様子を見てくる」言っただ外へ出た。

出会い

サブロウと呼ばれる若い男は、ボクシングスタイルで戦っていた。

一回りも二回りも大きいヤクザの男達を相手に、次々と倒している。

3人が路上にうめきながら横たわっている中、組長の盾になった男が遂にチャカ（拳銃）を取り出した。

トカレフの銃声だった。

1発目は外したが、さすがのタフなサブロウもその場に固まった。

日下は銃を抜き、その男の右腕を狙って発砲した。

男は右肩を抑えトカレフを落とした。

組長が驚いて後ろを振り返る。

「誰だ 貴様！」

「卑怯な真似はよくないな ガチでやるんだ」と日下が言う。

サブロウと目が合った、日下が頷くと彼は組長に近づいた。

パトカーのサイレンが聞こえる頃、組長はボロ雑巾のようになっていた。

「もういいだろ」と日下は言い、サブロウの腕を取った。

「俺は警視庁の機動隊員だ 日下という、初動班が来る前にここから逃げろ」と言った。

「後は俺に任せていいから はやく行け！」

サブロウは何も言わずその場から銀座の飲み屋街に消えて行った。

3日後、どこで調べたのか日下の携帯にサブロウから連絡があった。

「この間の礼がしたい」無愛想な声だった。

以降二人は兄弟のような付き合いを始めるようになったのである。

久しぶりに会ったサブロウに、日下は言った。

「武器と弾薬が要る、大至急手配してくれないか？」

「分かった、これから取りに行こう」と理由も聞かずサブロウは快諾した。

二人はすぐに店を後にし、横浜の本牧埠頭へ車を走らせた。

闇組織

深夜の首都高速湾岸線を飛ばし、1時間程で本牧埠頭に到着した。

日下は、サブロウの運転する外車の助手席で、警視庁を辞めたと告げた。

そしてこれまでの経緯を詳しくサブロウに説明した。

サブロウは一切質問せず、黙って聞いていた。

サブロウは22歳で日下よりも一回りも若いのが、洞察力に優れた賢い若者と日下は評価している。

18で北海道から東京へ出てきたと聞いていた。

地元では相当のワルであつたらしい。

東京で様々な職を転々とし、負けん気の強さが災いしたのか仕事の成績は群を抜くが組織の中では常にアウトローとなつた。

ことごとく上司と衝突し、手を挙げては会社を辞めざるを得なかつた。

ある時、バーテンダーの職を得てようやく慣れた頃、元ヤクザだという男と出会つた。

その男曰く、今はヤクザでは食っていけないが、儲かる方法はいくらかでもあるから仲間に成らないかという誘いだった。

腕っ節の強いサブロウが気に入ったそうだ。

そして足しげく通うその男のしつこさに根負けして、サブロウはこの男に賭けてみる気になったそうである。

最初は二人から始まり名づけた「銀総会」は、瞬く間に構成員を増やしていった。

儲かる裏の仕事ならなんでもやり、特に暴力団の依頼は危険だが、おいしい仕事だったという。

命知らずの若い奴等がどんどん加入し、邪魔になるような小さな組だったら簡単に潰すことが可能になっていた。

コンピューター犯罪からおれおれ詐欺まで億単位の成果が上がることもあったようだ。

そしていつのまにか、3000人を擁する闇の組織と成っていった。

特に武器の取り引きは、東南アジアのルート、ロシアのルート、中国のルートと様々で、暴力団抗争の時には高値で取り引きされるためサブロウはいつも武器弾薬をプールしていたのだ。

ロケットランチャーまでも揃っている。

それらを横浜の倉庫の隠し地下に保管していた。

サブロウは、ベントを倉庫の前に止めた。

待っていた銀総会幹部らが出迎えた。

「総長 お疲れ様です」と頭を下げる。

日下にも挨拶を丁寧にする幹部たちであった。

よく統率されたグループとみた日下は、改めてサブロウのリーダーシップに感心した。

部下に伴われて倉庫の内部に入ったが、中は薄暗く木箱が整然と並びごく普通の風景だった。

一際重そうな機械の部品が置かれたパレットの前に集団は立ち止まった。

フォークリフトでパレットをずらすと下に地下への階段が現れた。

武器庫

そこはまさに戦場で使用する兵器の見本市のような様相を呈していた。

黒光りする鋼鉄の銃器が並べられている。

鼻を突くオイルの匂いと火薬の匂いが入り混じり日下は懐かしさを憶えた。

父親の匂いである。

日下は、高校時代に射撃部に所属していた。

父親の影響で早くから射撃の魅力に取り付かれたのである。

父親は神奈川県警の機動隊員で、クレー射撃の名手としても国内競技では何度も優勝していた。

自然と直樹も父親と同じ道を辿るようになった。

高校時代の射撃の成績は群を抜いており、1年生でビームライフル競技の全国優勝を果たした。

そして最速でエアライフルの競技に転向出来たのである。

エアライフルは18才以上、日本ライフル協会による低年齢者推薦を使っても14才以上にならないと所持することも撃つこともできない。現状、高校のライフル射撃部に所属せずに低年齢者推薦を取

るのはほぼ不可能、それどころか昨今の状況から射撃部に所属していてもそう簡単には推薦も所持許可も取れなくなってきた。

それでは若い世代の競技者が育たない、10代前半から本格的な競技射撃を始めているヨーロッパや中国にはとても国際大会で太刀打ちできないということ、日本には所持許可の必要のない「ビームライフル」という射撃競技があった。光線銃だが非常に精密なもので、銃の形や重さ、引き金の引き味なども本物のライフルとできるだけ同じようになるように作られている。これなら高校生どころか中学生・小学生でも全く問題ない。公民館や体育館などで貸し銃を使って体験できる場を設けているところも数多くあり、日本ライフル協会が認める正式な競技なので、ビームの公的な大会などで好成績を記録すれば実銃の所持許可や推薦も取りやすくなるのである。

日下は18歳になると国際大会に入賞し、競技団体の中で一躍脚光を浴びる若手射撃手となっていた。

オリンピックを目指し大学進学を決めた時、父親が人質立て籠もり事件で殉職してしまう。

母親の反対を押し切って彼は進学を止め、警察官採用試験を受けたのである。

そして警視庁 機動捜査隊 狙撃特務班に配属されたのである。

その間に、バスハイジャック事件、麻薬常習者の拉致監禁事件などの凶悪事件の狙撃に成功を納めた。

20代で警視総監賞を2度も受賞したのは、存命警察官では日下直樹が始めてであった。

その後、主な都道府県にS A Tの配置が行われ、日下も警視庁のS A Tに転属となった。

特殊部隊（S A T）は、ハイジャック事件や人質立てこもり事件等の突発重大事案に的確に対処するため、被害関係者の安全を確保しつつ、被疑者を検挙することを主たる任務とした高練度の専門部隊であり、全国で計約200人の部隊員から成っている。

30代の後半になった時、要人警護のためのC P O（近接保護官）に抜擢された。

現在、50メートルフリーピストル（スタンディング部門）日本記録は日下が得点したものである。

試射を繰り返し日下が武器庫の中で選んだ銃器は、ブローニングハイパワーミリタリーモデルだった。

集弾性に優れていたのが気に入った。

予備にもう一丁手にした。

9mmパラベラム弾の箱を多めにバックに詰め込む。

サブロウが言った。

「これも必要でしょ」

手にはサブレッサーが乗っていた。

追跡者

「日下さん 人手が入用でしたら何人か貸しましょうか 内には命知らずの鉄砲玉がなまらおりますから」とサブロウが笑って言う。

「ありがたいが、これは俺個人の問題だから迷惑はかけられない」ときっぱりと日下が言う。

「銃だけで充分さ 感謝する サブロウ」

「関西方面は後藤組が仕切っています、一応話しを通しておきますので安心してください」

「では幸運を祈ってます 日下さん」サブロウは握手を求めた。

日下は黙って頷き、強く握り返した。

自分の子供といってもおかしくない年令差があるにも関わらず信頼のおける男と出会えて良かったと日下は思った。

翌日、日下は東明高速道を南下していた。

日本坂パーキングエリアを通過した時、後ろから一定の距離でついて来る一台のハマーに気付いた。

日下は愛車のZEROクラウンのアクセルを踏み込んだ。

3.5リッターV型6気筒のエンジンが唸りを挙げ始めた。

突然、ハマーの後ろから回転灯を回しながら覆面パトカーが現れた。ここで掴まるわけにはいかないと日下はさらにアクセルを全開にした。

速度リミッターは切つてある。

相手はGT-Rだった。

それもR35だ。

日下の闘争本能に火が着いた。

前方の車を蛇行を繰り返しながら追い抜いて行く。

280キロのメーターが振り切つていく。

Gが日下のアドレナリンをさらに放出させているようだった。

我に返つた日下は、このままだと一般車両を巻き込んだ大事故になると思いアクセルを踏む力を徐々に弱めていった。

「前の車 直ぐに停車しなさい！」と警視庁高速機動隊員の怒りの声が聞こえた。

ハザードにして日下は指示に素直に従った。

GT-Rから降りてきた警官は、運転席の窓を覗きこんだ。

その手には拳銃が握られていた。

反撃

咄嗟に運転席側のドアレバーを引き、右足で思いつき蹴飛ばした。ドアが勢いよく開き、偽警官にまともに当たった。

銃が暴発し、その男は後方に転がるように走行車線に飛び出した。

そして高速で走行中の数台の車に次々と撥ね飛ばされていった。

マネキンが空中を舞っているような異様な光景だった。

G T Rで待機していた仲間の男が慌てて助手席から降りて来ようとしていた。

直ぐに日下はクラウンを急発信させた。

後輪のタイヤから白煙を立たせながら、クラウンは尻を振って走り出した。

バックミラーに写る男は、走りながらも銃を撃っているようだった。

数発の着弾の音が車内に響いた。

しばらく走るとドアミラーに先程のハマーが現れた。

運転席後方のスモークされたウィンドウが下がり、M P 5を持つ男の顔が見えた。

次の瞬間、クラウンの窓ガラスが粉々に砕けた。

車内に風が嵐のように吹き込み始める。

日下は体勢を低くし、さらにアクセルを踏み込んだ。

エンジンが唸りを上げハマーを引き離していく。

数分後バックミラーのハマーの姿が点のようになった。

日下は車を乗り換えるため、豊川ICで降り、国道151号線に入った。

そして車を乗り捨て、東明ハイウェイバスの終点名古屋まで切符を買いバス乗り場に向かった。

まばらな乗客たちの中に紛れ席に着く、やっと落ち着いた日下は安堵の溜息を漏らした。

しかしこんなにも早く敵の手が回るとは、警察までをも巻き込む巨大な組織の力に改めて日下は脅威を感じた。

バスは定刻どおり発車するようだった。

日下は目を瞑った。

K C I A

笹山篤は、大阪教会の一室に軟禁状態にあった。

東京での家族惨殺、犯行途中に教団関係者に拉致され大阪まで移送されたのである。

道成寺光成は、元自衛隊員で統一教団青年部を取りまとめる幹部である。

3年前には、上九一色村のオウム真理教本部へ出向し武装化のための指導と武器の取り扱いに関する講師などを務めていた。

東京本部付きの武闘派の信者であった。

世田谷教会の依頼で急遽雲隠れした笹山篤を追うことになった。

ようやく練馬まで辿り付き彼の身柄を確保出来たのである。

だが、無残な犠牲者の姿を垣間見た道成寺は、笹山に嫌悪感を持った。

有力者の息子であるがゆえに、自分の欲望の赴くまま犯行を繰り返す若者。

この異常な殺人者に早く天罰が下る事を願った。

だが教団の命令で、あらゆる外敵から彼を守らなければならないのである。

道成寺は、屈強な信者を人選し連れてきていた。

笹山を監視して、騒ぎの収まるのを待つことにしていた。

大阪に来て3日目に教団本部から連絡が入った。

「警視庁を辞めた日下直樹が笹山を追って関西へ向かっている」

「阻止しようとしたK C I Aのエージェントが一人殺された」

「武器も所持しているらしい」

必ず日下は笹山篤を捜し出し、復讐を果たすつもりでいると道成寺は確信した。

「天罰だ」と呟いた。

今日の午後、韓国からK C I Aの応援が到着すると知らされ、どんな方法を使っても日下を始末せよとの命令が下された。

道成寺は閑空に彼らを迎えに出るため外出着に着替えた。

「直ぐ戻るから笹山から目を離さないように気をつけるんだ」と言い残して出発した。

3人の部下は、隣の部屋を見て頷いた。

しかし3人のまともな姿を見るのは、これが最後になるとは道成寺でも予想出来なかったのである。

殺戮

監視係りの3人は、2人の男は将棋をさし、1人は漫画を読んでいた。

「道成寺さんがいないと不安だな」と駒を動かしながら一人の男が言った。

「隣の部屋に殺人鬼がいるわけだしな」

「そついえば奴の部屋がやけに静かじゃないか」

「いつも音楽をガンガン鳴らしているのに」

「おい ちょっと見てこいよ」

「俺がいくのかよ まだ途中だぞ」

「いいよ 俺が見てくる」と漫画雑誌をめくっていた男が言った。

「サンキュウ！」と言って二人の男達は目を見合わせ笑った。

雑誌を放り投げ、立ちあがった男は隣の部屋をノックして入室した。

扉が閉まる。

数分が経った。

「王手！」と一人が言うのと同時に、扉が開いた。

「奴は生きてたか？」と二人が将棋盤から目を上げた。

そこに立っていたのは喉を切り裂かれ、腹から内臓を露わにした仲間だった。

「ひえー・・・」と二人は腰を抜かした。

襲われた仲間は、垂れ下がる腸を拾い集めたように手で押さえつけている。

喉から血が吹き出し口からは泡を吹いている。

ついには将棋盤の上につつ伏せに倒れ込んできた。

その時、背後で黒い影が動いた。

二人の男のうちの一人が「あぐう・・・」と唸った。

頸動脈を切られ噴出する血を手で押さええて必死で止血しようとする。

その背中に鋭いミリタリーナイフが突き刺さる。

血の匂いが部屋中に充満しだした。

地獄のような光景の中、残った男は出口に向かって這いずっていった。

完全に腰が抜けたらしく、小便も漏らしたようだった。

笹山はその男に跨り、片耳を切り取る。

また耳をそぎ取る。

両方の足のアキレス腱を切り裂く。

鶏の断末魔の叫び声のように絶叫が響きわたる。

笹山の下でもがき苦しむ男は、やっとのことで仰向けになった。

しかし、笹山はナイフを振りかざし心臓に向けて振り下ろして来た。

男はナイフの刃を掴み押し戻そうとした。

だが失血と痛みのせいで力が込められない。

手に全体重をかける笹山のナイフが徐々に男の胸に突き刺さっていく。

ゆっくりと刺さっていく刃が余計に痛さを増幅させるようだった。

ついに男は諦めた。

笹山は死んだ男の心臓を抉りだし、野獣のような雄叫びをあげた。

日下は統一教団大阪教会のビルを見上げていた。

雑居ビルが林立する一角にあるビルで、人の気配が無く静まりかえ

っている。

何故か胸騒ぎを憶えた。

弾倉を確認し、銃の安全装置を外した。

足早にビルへ近づき、そして入り口から中に突入した。

地獄絵図

建物の中は、人の気配がせず静まり返っていた。

1階は集会所のような大広間で祭壇が設けられている。

薄暗がりの中を日下は目を凝らし、上を見上げた時信じられないものを発見した。

顔が無い女性の胴体が天井の梁から逆さに吊るされていたのだ。

裸のその体は陰部から臍にかけて切り裂かれていた。

その体内の血は全て首の切り口から流れ出ていたのか、真下の床にはどす黒い血だまりができています。

頭部はどこにいったのか周辺には見当たらない。

これも奴の仕業に違いないと日下は思った。

笹山がまだこの建物の中に潜んでいる事を祈りながらも、緊張が日下の銃を握り締める手を震わせた。

2階に慎重に上がった。

事務所の中にもまた首の無い死体が転がっている。

大きな金庫が開けられたままになっていた。

その側には人形遊びでもしていたように、手足をバラバラにした死体があった。

これが人間のする事なのか。

床は地の海と化し、まるで地獄絵図を見てるようだった。

日下は血を踏まないようにつま先立ちで3階の階段を上がった。

宿泊施設なのか中通路を挟みドアが並んでいた。

奥で物音がしたように感じた。

銃を目線に構え狙った先に集中をする。

一歩一歩進み始めた。

開いたドアの中を目の端で確認する。

やはり人と思われる死体が放置されていた。

その瞬間、前方を黒い人影が横切った。

鈍い発射音と共に9mmパラベラムの3発の銃弾が影を追い駆けた。

（奴だ！）

日下の心臓が高鳴った。

追撃

鉄製の階段を駆け降りる足音が聞こえる。

非常階段から逃げる笹山の靴音だった。

（逃がすものか）日下は後を追った。

デイパツクを背負った黒っぽいジャージ姿の笹山の後ろ姿が見えた。

日下は銃を腰のホルスターにしまいながら、必死で追い駆ける。

手すりに手を掛け転倒しないように、いきなり駆け下りるが笹山の足も速かった。

夕方の大阪の繁華街に逃げ込む笹山の姿を追いながら、日下は息が切れ始めるのが忌々しかった。

買い物客の往来が激しい商店街に入ると、いよいよ笹山との距離が大きくなる。

笹山は器用に人の波を縫って行く。

日下は人にぶつかり怒号が飛び交った。

「何しくさる！」

運悪くチンピラに当たったらしい。

数人が前方を塞いだ。

「邪魔だ どけ！」と日下が吼える。

「誰に口きいとんや?!」

「いてまうぞ、こらあ!」

もう追いつくのが不可能になった事を悟った日下はヤクザに切れた。

腰の銃を抜いた。

「おっさん おもちゃ出して何しとんねん」彼らがどつと笑う。

日下はニヤリと笑い、空に向けて発砲した。

悲鳴が上がり、彼らは慌てて逃げ始めた。

日下は笹山の逃げた方向を目指し駆け始める。

走る前方は、人ごみがさつと分かれ走り易かった。

彼は銃を握っているのを忘れていたのだ。

指名手配

道成寺が大阪教会に戻ると教会周辺の道路は警察車両と救急車が止められ、大勢の野次馬に囲まれ騒然としていた。

「何があったか見て来てくれ」と助手席の信者に指示し、車を1ブロック先に止めた。

しばらく経つと彼が戻って来た。

「道成寺さん 大変な事になっています」

「どうした？」

「教会の中が死体の山になっているらしいです」声が震えている。

道成寺は携帯を出し、留守番している仲間に架けた。

どの携帯も呼び出しに応じない。

「笹山の奴！」

後ろに乗っている韓国人達に英語で説明した。

「とりあえず別の教団施設に向かいます」と言ってハンドルを握った。

堺教会の建物に入ると、教会関係者がテレビに向かっていた。

「道成寺さん 阪南町はどうなっているんです？」と堺教会の支部長が問い掛けてきた。

「私も分からない、韓国からの客を空港へ迎えに行った帰りなんだ」
阪南町（大阪教会）には5人の職員と東京から連れてきた部下が3人、そして笹山篤の合計9人がいるはずだった。

地元の教会員は、ここ数日間集会も中止していたため教団職員が教会に詰めていただけである。

テレビの速報は、大阪府大阪市阿倍野区阪南町2丁目の統一原理教団の大阪教会において複数の男女の惨殺死体が発見された模様と伝えていた。

被害者は鋭利な刃物による致命傷を受けていたと伝えられたが、銃の発砲音も聞こえたという周辺住民の証言もあったようである。

そして続報がアナウンサーに伝えられ、犯行現場の教会施設から500メートル離れた商店街でも発砲事件があったことが通報で判った。

目撃者が多数あり、携帯のカメラで発砲した犯人の顔が撮影されテレビ局に持ち込まれた。

そしてその画像が画面に写し出された。

中年の背広姿の男が銃を手にしているとところだった。

人相の悪い男達に囲まれ険悪な雰囲気になっている。

突然、銃を空に向け発砲した。

そして一目散に走り去って行く。

何かを追っているようにも見える。

もう一度、男の顔が大写しになった。

「日下直樹！」道成寺が呟いた。

3時間後、日下直樹に逮捕令状が出され、東京都練馬での一家殺害容疑と統一教団大阪教会関係者殺害容疑及び銃刀法違反で全国に指名手配された。

翌日、全国紙の朝刊の一面に記事が大見出しで報道された。

元警視庁警備隊警護課の警察官である日下直樹は、2月12日に家族を自宅で殺害し其の後大阪に逃亡、21日統一教団大阪教会の施設内で男女8人を刺殺した。

ナイフや銃器を所持しており、無差別に発砲する可能性がある。

東明高速での発砲事件にも関与している疑いも出てきた。

犯人の日下直樹は、まだ大阪市内に潜伏している模様である。

日下直樹は、ピストル射撃の日本記録保持者でもあり、警視総監賞を2度授与されたエリート警察官であると報じていた。

無差別連続殺人事件として指名手配リストの最重要手配犯としてリストアップされたのである。

国枝は記事を読み、何か裏があると感じた。

そして日下の携帯を呼び出した。

その頃、日下はサブロウの手配で大阪の銀総会の事務所に匿われていた。

鳴った携帯の受信画面を見ると、特務班 国枝と出ていたので迷わず通話ボタンを押した。

「国枝さん しくじりました」

全てを察したように、国枝は何も問い詰めなかった。

「単独で動くのは危険だぞ 俺も大阪へ入るから会って話そう」国枝が言う。

「分かりました 駅に着いたら連絡をください 迎えを出します」日下は言うって携帯を切った。

国枝はさっそく旅行の準備を始めた。

職場には、体調不良という理由で3日間の休暇を貰う。

手帳に拳銃、手錠も返さず、防弾チョッキも荷物の中に入れそのまま所持することにした。

そして1時間後には品川駅の新幹線ホームに立っていた。

モンスター

これら大量殺人を犯した笹山篤は、1981年4月に群馬県桐生市で生まれた。

父親は笹山財閥の次男として政界に進出し1986年初当選後衆議院議員を7期務めた。

篤が7つの時、郵政政務次官に就任したのをきっかけに東京都世田谷に引っ越した。

篤の生い立ちについては特に語られるべきことがないのか、あまり情報がない。

だが経済的に不自由はなく、母親と祖母にべたべたに甘やかされ、ほとんど叱られることのない幼少期を過ごしたようだ。

高校1年の時、篤は家出少女を拾って自宅へ入れたことで退学となり、アメリカの高校に強制的に編入させられた。

少女の件は、不純異性交遊ということで公にされなかったが、その少女は長期間に渡り、篤の部屋に監禁され彼から暴行を繰り返されていた。

両親が篤の部屋に初めて入った時見たものは、SMの成人映画やスプラッター映画のビデオと雑誌が本箱にびっしりと並んでいたのがある。

少女の親族には、多額の慰謝料を積んで示談で済ませたようだった。

篤のアメリカでの生活は、ドラッグと異常なSEXに溺れていたようである。

咎める者が誰もいなかったのが、篤に潜在するサディスト的快樂嗜好性向を増幅させた要因でもあった。

小動物への虐待から始まり、人間の血の味を知ったのもこの頃からだっただ。

高校卒業と同時に篤は日本に呼び戻される、帰国後自分を捨てた家族への怨みが日々積みもり続けた。

父親や家族への憎しみが大量殺人へと転化したのである。

2チャンネルの掲示板に書き込みしたのも本人だった。

笹山篤は、大阪のネットカフェの一室で夜を過ごすつもりでいた。

今日、日下の顔を見た時はさすがに驚愕したが、あの警官も殺すつもりでいたので追ってくるのはウェルカムだ。

ホームセンターで買った数本の柳刃包丁を並べて篤は悦にいつていた。

(明日も大騒ぎになるぞ)と悪魔のような薄笑いを浮かべた。

搜索

国枝は品川を出て2時間半後、定刻通りに新大阪に到着した。

駅周辺はマンション・オフィスビル・ビジネスホテルなどが立ち並び、大阪市内屈指のオフィス街である。梅田の市街地を抱える大阪駅ほどではないが、毎日多くの人で賑わっている。ただし、商業施設はほとんど無く、商業地としては乏しかった。

東淀川区に位置する東口は、駅中央部の商店街からは外れているため、人通りが少なく住宅地が広がっている。

事前に連絡があつた東口の階段を降りていくと、正面に一台の黒塗りの外車が停まっていた。

人相の悪い男達がドアを開け待っていた。

中を覗くと後部座席には日下が乗っている。

国枝は荷物をドアの側の男に預け、日下の横に並んで座った。

「何て言つてよいのか・・・」と日下は頭を下げる。

「いいんだ それより詳しくこうなつた事情を説明してくれないか 日下さん」と国枝は疲れが滲む日下の顔を見つめた。

日下は、笹山の話から始め出し、そして大阪教会での追跡劇で話しを終えた。

「なんて事だ まったく信じられない」と国枝は頭を抱えた。

「笹山を早く掴まえないとさらに犠牲者が増えるのは間違いないな」と国枝が言った。

「こっぴどしている間にもどこかで悲鳴が起きているのではないかと」と日下の顔色が曇る。

銀総会の構成員たちが笹山が潜り込みそうな周辺のホテルを隈なく洗っている最中だった。

銀総会の事務所に戻った二人は、捜索隊の連絡を待った。

夜中の2時を回った時、事務所の電話が突然鳴った。

銀総会の幹部が電話を取る。

相手の話を黙って聞きながら頷いている。

そして日下の方を見て「奴に間違いないな！」と電話口で言った。

(見つかった) 国枝と日下は目を見合わせた。

受話器を置いた幹部の男は二人に説明した。

「今部下から連絡がありました。梅田のネットカフェに笹山とおぼしき背格好の若い男が泊まっているとの情報が入ったそうです」

「今部下達が現地に向かっているとところだそうです」

「発見次第掴まえて来るように指示しました」

しかしそれから2時間経っても連絡が入らなかった。

幹部も焦れて再三部下の携帯に連絡を入れるが応答が無かった。

「返り討ちにあう奴らじゃないんだが」と首をひねる。

日下は電話帳を調べ、かたっぱしから梅田のネットカフェに電話を架けた。

数件目で何度電話しても出ない所があったが、飛ばして残りも架けたが異常は無かった。

そしてもう一度架けたがやはり出なかった。

「ここだ！」と日下が叫んだ。

慌てて全員が事務所から飛び出し車に乗った。

運転手以外全員が銃を取り出し銃倉の点検をしている。

国枝も腰からリボルバーを抜いた。

車は猛スピードで国道を駆け抜けた。

証拠隠滅

梅田の繁華街、雑居ビルの地下にそのカフェはあった。

ビル裏の路地には連絡の取れなくなった銀総会の仲間の車があった。

間違いなくここに来ていたようだ。

日下を含めた男達は足早に正面入り口に回った。

深夜の3時近く通行者もまばらだった。

ネットカフェのネオンサインが虚しく地下を指し示していた。

銀総会の若い男が銃を構え先頭に立ち降りていく。

受け付けには誰も居なかった。

店内は薄暗く、仕切られた沢山の小部屋が並んでいる。

奥から明かりが漏れていた。

5人は足を忍ばせ慎重に近づき、トイレのドアノブに手を掛けいききに引き開けた。

防毒マスクを着けた二人の男が振り返った。

黒い合羽を着た二人の姿を見た日下は、世田谷で会った始末屋だったことを思いだした。

「手を挙げる」と銀総会の男が威嚇した。

銃を突きつけられた二人はのこぎりを投げ出しゆっくりと手を挙げ立ち上がった。

その二人の足元には死体が数体重なるように倒れていた。

黒いビニール袋がいくつも置いてあり、トイレの中は硫酸の匂いと血の匂いで咽返るようだ。

日下達は慌ててハンカチで鼻と口を覆った。

二人を引っ張り出すように外へ連れ出す。

彼らは死体を解体し、内臓は硫酸で溶かしてトイレに流そうとしていたようだった。

床は血だまりになっている。

遺体を確認すると銀総会の仲間2人と店員と客が数体、笹山の姿は無かった。

銀総会の幹部が携帯で連絡し、応援を打診した。

始末屋の若い方の男が隙を見て逃げ出そうとしたが背中を撃たれ転倒した。

苦しむ男を銀総会の男が蹴り始め間もなく動かなくなる。

合羽を脱がせた眼鏡の男を国枝が後ろ手に手錠を嵌めた。

ポリタンクを持った応援の男達がやって来た。

幹部の男が指示し、死んだ仲間を運び出した。

そして全員が外に出た。

外の空気は新鮮だったが数秒後に足元からガソリンの匂いが上がってきた。

「!?!」 日下は嫌な予感がした。

幹部は皆を退避させた後に火炎瓶のようなものを地下に投げ入れた。

爆音と共に火柱が地下から上がってくる。

日下達は急いで車に駆け戻り急発進させた。

来た道に戻る途中、数台の消防車とすれ違う。

笹山に繋がる手掛かりは横に座る眼鏡の男だけだった。

妙に落ち着いている男だが、どんな手を使ってでも吐かしてやると日下は思った。

拷問

事務所へ戻った日下達は、眼鏡の男を椅子に縛りつけた。

口の中にハンカチを押し込み自殺するのを防いだ。

窓の外は夜が明け始めているようだった。

殺された銀総会の二人の男達は首に細い紐で括られた跡があった。

笹山に殺られたわけではなさそうだった。

窓から射す薄明かりの中、拷問が始まった。

「痛い思いをする前に知っている事を全て吐き出せ」と幹部が言う。

眼鏡の男は無視するように目を瞑った。

幹部の男は、眼鏡を両手ではずし床に落とし靴で踏みつけた。

男は一瞬戸惑う顔色を見せた。

男は殴られ続けた。

歯が折れ、顔の形が変わった。

業を煮やした銀総会の幹部は、男の右眼を割り貫いた。

声に成らない絶叫が部屋の中に響いた。

「どうだ 吐く気になったか？」聞いた。

痛みのために頭をゆすっていた男はしきりに頷き始めた。

「ようし 鎮痛剤を打ってやろう」と言っつて部下に注射を命じた。

「ここからは日下さんをお願いします」と言っつて椅子に座った。

日下は男の口からハンカチを抜き取り、水を飲ませてやる。

「あそこで何が起こったんだ」と日下が口火を切った。

「俺は現場には居なかつたから詳しくは分からんが、議員の息子があそこに居たらしい、そこにあんたらの仲間が押し入った。同時に統一の男達が現れてあつという間に片付けてあの息子を連れていったという話だ」

横から幹部の男が口を挟んだ。

「あの二人は元プロボクサーだぞ、そう簡単に倒せるはずはない」と言っつ。

「統一と一緒にいたのはK C I Aの連中だそうだ」

「ワイヤー一本で殺されたのは間違いない、凄い奴らだ」

「大きなお世話かもしれないが、お前達もあまり深入りしない方が身のためだ」と始末屋が言っつ。

「あんたも知っているとおり、俺達は早川さんから連絡があり、これから起きる死体の処理を頼まれ、昨夜大阪に入ったんだ」

「あんたらの組織には怨みも何も無い、これが俺の仕事なのさ」

「笹山は今どこにいるか分かるか」と日下は聞いた。

「・・・」男は躊躇した。

「あんたは警官だ 俺を殺さないで約束してくれ」と男が哀願した。

「分かった 約束する 殺しはしない」と言っただけで日下は幹部を見た。

彼も頷いた。

「分かった 今奴らは統一の豊中支部の教会に居るはずだ、俺達も最初に待機していたところだった」

「勿論K C I Aの奴らもいるんだな」

「たぶん間違いない」

さっそく日下と国枝は、部屋を出て襲撃の段取りのため打ち合わせを始めた。

その時、隣の部屋から始末屋の断末魔の声が聞こえた。

日下が覗くと男は左眼を刳り貫かれて失神したところだった。

「死んだわけじゃないから心配するな 今医者を呼ぶ」と幹部が言

った。

こいつらも恐ろしい奴らだと改めて日下は思った。

豊中支部教会へは30分ほどの道のりである。

「ガードがプロの殺し屋だと慎重に対処しなければならない」と国枝が言う。

日下も頷いた。

待ち伏せ

阪神高速11号池田線の豊中南出口で降り、統一の豊中教会へ向かった。

彼らは、2ブロック先のモータープールに車を入れた。

事前に連絡していた、銀総会の息のかかった修理工場だった。

そして総勢8人で教会の入っている5階建てのビルに歩いて向かった。

ビルに入ると二手に分かれ、日下と国枝は銀総会の若手と4人でエレベーターに乗る。

もう一方は幹部の男と部下3人が非常階段から上がった。

全員が銃器を所持し、いつでも発砲出来るように安全装置を外してある。

始末屋の話によると3階に教会事務所があるはずだった。

エレベーターのサインが3で停まった。

ゆっくりとドアが開く。

日下は嫌な予感がした。

その時足元に催涙弾が投げ込まれてきた。

あっという間にガスがエレベーター内に充満しだした。

銀総会の若い男達が咳き込みながら慌てて外に飛び出す。

煙の向こうから銃の発射音が低く反響した。

二人の男は応射する事も出来ずその場に倒れた。

日下は、ハンカチで口と鼻を覆い身を低くして催涙弾を外へ蹴り出した。

涙を流し咳き込みながらも国枝がエレベーターのボタンを押す。

煙の向こうから銃弾が襲ってきた。

日下が銃倉を撃ち尽くす勢いで相手に向け連射する。

やがてドアが閉まり出した。

非常階段の方角へ日下は大きな声を出して警告した。

「待ち伏せだ！ 気をつける！」

ドアが閉まった。

国枝は非常ボタンを押し、3階と4階の途中で停止させ様子を窺った。

3階では激しい銃撃戦が繰り広げ始めたようだ。

非常ボタンを解除し4階で二人は降りた。

階下からはまだ銃声が聞こえてくる。

日下の後を国枝が続き、慎重に非常階段を3階へ降り始めた。

国枝は背後に人の気配を感じた途端にワイヤーが首に食い込んだきた。

一瞬の隙を縫い自分の指2本を頸動脈を庇う形で中に入れることが出来た。

物凄い力で締め上げてくる。

国枝の両足が浮き始める。

先を行く日下は、後からついて来るはずの国枝の異変に気付いた。

振り向きざまに国枝の背後の男の眉間をサプレッサーを付けたハイパワーで撃ち抜く。

国枝と即死した暗殺者は絡まるように日下の足元へ倒れ込んだ。

日下は、咄嗟に国枝の体を引き止めて転倒のダメージから彼を救う。

暗殺者は階段を転げ落ちていった。

国枝の首の跡が痛々しかった。

「先に行ってくれ 俺は大丈夫だから」と国枝が枯れた声で言う。

「すまない 後は俺に任せてくれ」と言いながら日下は降りていった。

3階はまだ煙が燻っていた。

通路を挟み銃声は散発となっている、双方に受傷者がいるらしい。

日下は背後から幹部の男の元に寄った。

「良かった 無事でしたか あれ国枝さんは？」

「大丈夫 後からすぐ来る」

「状況は？」と日下が聞いた。

「部下が3人死んだようだ 一人はその角に居る」

彼は勇敢にも応射し続けている。

残る一人を幹部は指差す。

通路の真中で大の字に倒れてはいたが、まだ息はあるようだった。

「相手は3人だ」

幹部が見る方向を日下の目が凝視する。

「俺に任せろ！」と言って日下は、煙の合間に見える彼らの微かな

影を捉えた。

時々見せる彼らの顔半分、こちらに銃を向け撃ってくる。

日下はそのタイミングを見逃さなかった。

3発のくぐもった発射音が通路を走った。

肩に当たり、目に当たりそして膝を撃ち砕いた。

瞬く間に3人の男達の戦意を奪ったのだ。

幹部が信じられないと驚いた顔で日下を見る。

幹部は横たわる敵に近寄り、次々と彼らの頭を撃ち抜き止めを射した。

「さあ 笹山を捜そう」と言いながら日下は幹部の肩を叩いた。

逃走

国枝はようやく意識がしつかりしてきた。

頭をぐるりと回してから起き上がろうとした時、上から駆け降りてくる足音を聞いた。

M37をホルスターから抜きながら臨戦体勢を取った。

癖毛の若い男と目つきの鋭い大きな男が現れた。

「止まれ！」と言いながら国枝は、銃を突きつけ二人を制した。

声が掠れたままで迫力に欠けたのは否めない。

用心棒のような男がP226を向けた。

「銃を降ろせ！」

至近距離の睨み合いがしばらく続く。

若い男がウエストバッグから取り出した包丁を握った。

(こいつが笹山だ)と直感し国枝が睨みつけた。

国枝の様子を見ていた道成寺は、彼のダメージのある姿に頼むように言った。

「2対1だ 無理しないで我々を行かせろ」

「だめだ 行かせることは出来ん 特に笹山！お前は逮捕する」と
屹然と言い放つ。

道成寺が動いた。

その瞬間 2発続けて銃声が轟いた。

道成寺は左肩を撃たれて弾き飛ばされ、国枝は胸に銃弾を受け仰向けに倒れた。

そして口から血を噴出した。

笹山は逆上し、国枝に跨り包丁を振りかざそうとしている。

後方から銃声が聞こえ、包丁が弾け飛んだ。

驚いた笹山は振り返ると、肩で息をする道成寺が銃を構えていた。

「これ以上しやがったら ぶつ殺すぞ！」と道成寺が唸る。

焦った笹山は、慌てて階段を駆け下りて行った。

道成寺は銃を放つてから右手で銃創を受けた肩を抑え、壁を背にゆっくりと腰を降ろした。

間もなく銃声を聞きつけた日下達が上がって来た。

「国枝さん！」日下が抱き起こしたが、見た目に重症であることが分かる。

幹部の男が道成寺に銃を突きつけている。

「お前は誰だ 何があった？」と詰問する。

「俺は教団の者だ 笹山を逃がそうとしたが あの人に止められ相撃ちになった」

「笹山は逃げたんだな？」

「ああ・・・」と力なく道成寺が応える。

「死ねや」と言っつて銃を頭に向けた。

「そいつを殺すな 証言者だ」日下が止めた。

「二人を大至急医者に見せてやってくれ、俺は笹山を追う」と言っつて立ち上がった。

「初動班が来る前に、一刻も早くここから全員を引き上げさせるんだ」

幹部は頷き、携帯で修理屋を呼んだ。

「ビルの裏に大きめのバンを持って来てくれ、けが人が多数いる大至急だぞ」

彼の言葉を聞いてから「頼む！」と言っつて日下は笹山を追っつて駆け出した。

外に飛び出すと、夜が白々と明け始めていた。

遠くに笹山の走る姿が小さく見える。

靴音が微かに響いていた。

凶行1

突然、笹山の姿を見失った。

さっきまで後姿を確認して必死で追い駆けていたがぷつぷつりと影も形も無い。

すると路上に困った顔の男が立って居た。

携帯で窮状を訴えているようだ。

側に寄って様子を見てると、どうも車を盗まれたようだった。

憤慨して男は携帯を切った。

「どうしました？」と日下は声を掛けた。

「どうもどうも若い男に車を盗まれたんだ」

「警察は別の事件で忙しいから取り合ってくれないのさ まったく」

「そいつはどっちの方向へ行きましたか？」

「池田市方面だと思っけどな・・・」

「乗り逃げされた車は何ですか」

「黒のレクサスだよ」

礼を言つて日下はちょうど通りかかったタクシーを掴まえ乗り込んだ。

残された男は不思議な顔をしてタクシーを見送った。

「たった今盗難された黒いレクサスを追っている 池田市方面へ速めに走つてくれないか金は弾むから」

「朝から難儀やなあ」と言いながら運転手はアクセルを踏み込んだ。

池田市に入つてもそれらしい車を発見することは出来なかった。

「頼むから警察無線に合わせてくれないか」と頼んだ。

「そりゃ 無茶やわ お客さん」とむっとしてバックミラーを見る運転手。

「俺は銀総会のものだ 礼は必ずするから頼む」と日下は言った。

「・・・」しばらく考えていた運転手は、無線の周波数をチューニングし始めた。

「銀総会はんに睨まれたら大阪で商売できへんしな」

「ありがとう」

無線機から大阪府警指令センターの女性の声が聞こえ始めた。

豊中市服部豊町2丁目12-26で発砲事件発生・・・

池田市緑丘1-5-1大阪教育大学付属池田小学校で不審者が侵入
・
・

「運転手さん この小学校へ大至急向かってくれ」と言って銃の弾倉を抜いた。

「はい！」銃を見た運転手は、タクシーを猛スピードで直進させた。

10分後、日下は小学校の正門の前に立った。

正門脇に黒いレクサスが停まっている。

校舎の中から子供達の悲鳴が沸き起こっていた。

日下は校舎目指して走った。

凶行2

日下は時計を見ると午前11時過ぎであった。

笹山は、10時10分過ぎころ、2年南組テラス側出入口から担任教員不在の2年南組教室内に入った。

突然の来訪者に子供達は啞然としていた。

しかし出刃包丁を手にするその姿に異変を感じた子供たちはパニックに陥った。

笹山は、逃げ惑う子供たちを追い廻し5名の児童を突き刺し死に至らしめた。

彼は2年南組の教室テラス側出入口からテラスに出て東に隣接する2年西組の教室に向かった。

窓から中を覗きこむと、担任教員を前に児童全員前を向いて座り、笹山がたった今犯した惨劇に気がついていないようだ。

教師は、笹山の方向を向いていたが生徒に気を取られているようだった。

笹山は教室に侵入する際大きな物音をたてたが、それでも教師は気が付かなかった。

彼は侵入したと同時に、3名の児童を次々と突き刺した。

ようやく犯人に気付いた担任教師は、悲鳴をあげ、校内放送を使って助けを呼ぼうとマイクを取ったが、児童が次々と刺されていくのを目の当たりして頭が真っ白になってしまふ。

担任の女性教師は、警察へ通報するため廊下側前のドアから出て事務室に向かって廊下を走った。

途中、彼女は、廊下で倒れて苦しんでいる児童（この2年南組児童は他の教員がかかわるまで約6分間放置の状態であり、その後死亡した。）を見たが、そのまま事務室に飛び込み、10時18分に110番に通報した。

彼女は、事務室にて110番に通報した際、警察に事件の詳細を聞かれ、あまりの動揺に事情説明に時間がかかった。

そのため、警察からの救急車の依頼が遅くなり、警察が、救急車を要請したのは、通報を始めてから5分後であった。

担任教師不在の間に、笹山は逃げる児童を追い回し、教室内、出入口付近、廊下で5名の児童を突き刺した。

さらに笹山は、2年西組教室後方廊下側出入口から廊下に出て、東隣にある2年東組に向かった。

笹山は邪魔に入る者も無く、小動物の群れに襲い掛かるライオンのような気分だった。

気分が昂揚し、薬をやっている以上のエクスタシーを感じていた。

2年東組廊下側出入口から教室内に入り、子供1人を突き刺し逃げる子供の背を切り付けた。

気付いた担任の男性教師が、椅子を持って追い掛けてきた。

テラス側出入口に向かって逃げたが、その途中で教室後方にいた恐怖のあまり立ち尽くす児童1人と、さらに同出入口付近で別の児童1人を突き刺した。

笹山は、教室テラス側出入口からテラスに出たところ、通り掛かった1年南組の担任教師にタックルされた。

力の強いその教師に取り押さえられそうになったが、笹山はその教師の顔を出刃包丁で突き刺した。

背後から椅子を投げつけてくる年配の教師がいた。

笹山は不敵な笑いを浮かべその教師を威嚇した。

逃げ越しになる教師、テラス上からこちらを見下ろす子供と目が合った。

その子供らを西方向に追い掛けはじめた。

無念

10時20分ころ、笹山は、1年南組教室内に児童の姿を認め、同教室テラス側出入口から同教室内に入った。

それまでの間、3名の教師が1年南組の横を通過したにもかかわらず、1年南組にいた生徒に危険を知らせ、避難するように声かけできておらず、避難誘導が行われなかった。

笹山は、緊急連絡を受けて教室から出ていた教師不在の1年南組教室内に入った。

悲鳴があがる教室内で包丁で3人の児童を突き刺した。

さらに、残る子供たちを教室テラス側前方に追い詰め出刃包丁で次々と突き刺した。

駆けつけた2年生の担任教師に背後から出刃包丁を持っている右腕をつかまれた。

しかし、異常なほど気が昂ぶる笹山の動きにはついていけなかった。

あっという間に体勢を入れ替えられ包丁の刃を受けてしまう。

引き続き、出刃包丁を左手に持ち替え、倒れている子供たちを突き刺し始めた。

笹山の異常さは、打撃を受けて倒れている相手をさらにいたぶるというサディスティックな残虐嗜好だった。

無抵抗な者にさらに痛手を負わせ、その反応を楽しむおぞましさである。

その時、数台の大阪府警初動捜査班の警察車両のサイレンの音が聞こえた。

（もう少しで最高の気分を味わえると思ったのに）と呟きながら、もう一度跨った子供の背中に包丁を入れようとした時。

「止める 笹山！」と絶叫のような声がした。

顔を上げるとそこに鬼の形相で立っている日下だった。

手には銃が握られていた。

笹山は包丁を持つ手を上げながらゆっくりと立ち上がった。

日下は、その包丁を持つ左手の手首を狙って撃った。

骨が砕け散り、包丁ごと手首から先が吹っ飛んで行った。

「ギャー」と笹山の叫び声が校内に響いた。

笹山はささくくれたった左腕を抱えながら蹲る。

日下は足元の子供の脈を確かめ、（まだ助かる）と思い抱き抱えた。背後からばたばたと足音が聞こえた。

日下が振り返ると、機動隊員に混じり早川がいた。

「日下！もう止めるんだ さもないとここで死ぬことになるぞ」と早川が言った。

ゆっくりと子供を降ろした、日下は笹山に向きかえり銃口を向けた。

その瞬間、早川の指示で機動隊のスナイパーが日下を狙った。

激しい銃声の中、日下は笹山に止めを射すことも出来ずにその場に転倒した。

即死状態だった。

早川は無線で救急隊を要請した、笹山だけのために。

児童8名（1年生1名、2年生7名）が殺害され、児童13名・教諭2名に傷害を負わせる惨事となった。

冤罪

日下直樹は10数発の弾丸を浴び、愛する家族のもとに旅立って行った。

ただ彼の心残りには、笹山篤を道連れに出来なかったことだろう。

早川警視は、全ての殺人事件を日下の犯行であると会見で発表した。

池田小学校の関係者からは犯人違いとの訴えもあったが警察からは黙殺された。

国枝大輔は豊中での銃撃戦後に病院に運ばれ一命を取り留めていた。

そして入院中、日下の死亡後に東京大阪連続殺人犯として立件されたことを知った。

動かせない体を呪いながら、日下の無念さを思うと居た堪れなかった。

しかし国枝もまた組織から世田谷の解決が出来なかった事に対して引責辞任すように申し渡された。

警察組織から見放された今となっては、きっと自分も命を狙われるのは間違いない。

道成寺も同じ病院に入院していた。

肩を貫通した銃創のため、包帯で右肩を覆われていたが病院内を歩

き回っていた。

国枝の病室にも度々顔を出していた。

元は互いに敵同士だったが、打ち解けあうのも早かった。

特に笹山篤に対する怨みは、二人に共通する思いであった。

彼も統一教団を脱会させられていた。

国枝が回復するまでまだ1ヶ月ほどかかる模様だった。

道成寺は先に退院し、笹山の動向を探る方策を国枝と相談した。

国枝は銀総会のサブロウを尋ねるようにと告げ、大阪銀総会の幹部に連絡を取った。

その後、国枝の携帯に直接サブロウから連絡がきた。

「日下さんのことは無念でなりません この仇は必ず討ちます」とサブロウは心底怒りが漲っているように国枝に訴えた。

「私も復帰できたら道成寺と一緒に日下君の汚名を晴らすつもりだと国枝は言った。

「軍資金や人手が必要でしたらいつでもも言っして下さい 全面的に協力しますから」と言ってサブロウは電話を切った。

国枝はまずこの怪我を早く治すことに全力を尽くそうと思った。

ベッドの中で眠りに就いた。

悪夢

桜前線の北上と共に大陸から西日本に高気圧が張り出してきていた。

4月上旬にしては汗ばむほどの陽気となった。

国枝の銃創の傷もほとんど癒え、退院を3日後に控えていた。

毎週末、見舞いに来ていた家族も自宅で国枝の帰りを待っている。

道成寺は2週間前に退院し、銀総会の事務所に匿われていた。

この1ヶ月の間、夜9時には就寝し朝6時に起床するのが日課である。

しかしこの夜はなかなか寝付きが悪く、12時ぐらいいまでウトウトとしていた。

1週間前に個室から4つ病床のある大部屋に移されていたが、同室者は次々と退院して今は国枝一人になっていた。

寝汗をかき寝苦しさのためか、国枝は眼を醒ました。

枕もとの時計を見ると2時を廻っていた。

ふと人の気配を感じ、部屋の隅を凝視した。

男のようなシルエットが浮かび上がるように立っていた。

「誰だ！」と声を掛けたが声が出ない。

まったく体が動かなくなる金縛り状態だった。

その侵入者は黒いコートを羽織り、両手をポケットに突っ込んでいる。

顔は帽子を目深に被っているため判別が出来ない。

次の瞬間、その男は右手をポケットから抜いた。

その手は黒い革手袋を嵌めている。

そしてその手を左側のコートのポケットの下を押さえるようにした。

ゆっくり抜いた左手が非常灯の鈍い光に当たり反射した。

手が鋭いナイフのように成っている。

いや手首から先が・・・ナイフなのだ。

侵入者はそのナイフを口に持っていき舌で刃先を舐め始めた。

不気味な男は国枝にゆっくりと近づいて来る。

ナースコールのボタンを押そうにも手がまったく動かない。

国枝の枕元までやってきた男は、国枝の寝巻きのボタンを一つ一つ切り落としていく。

国枝の恐怖の目だけがその動作を追っている。

胸のボタンを全て切り落とした後、ナイフの先で胸元をはだけさせた。

国枝の胸には銃弾の跡が生々しく残っていた。

侵入者はその傷跡をなぞるようにしたあと、ゆっくりと刃先をその傷の窪みに射し込み始める。

血が噴出した。

痛みに耐えかねた国枝は、大声で叫んだ。

「止める！」

手を振り上げ、飛び起きた国枝は、全身汗まみれで額から滴り落ちるほどだった。

直ぐに手を胸元を持っていく。

血は出ていなかった。

夢なのか！？

時計をみると午前4時だった。

何気なく見ると部屋のドアが微かに開いている。

そして掛け毛布の上には寝巻きの上着のボタンが数個落ちていた。

「・・・」

慌てて国枝はナースコールのボタンを押した。

狩人

慌てて来た看護師に国枝が聞いた。

「黒いコートを着た男が詰め所の前を通らなかったかい」

「いいえ 私はずっと居ましたけど気がつかなかったわ」

「酷い汗ですね 今着替えを持ってきますから」と言っただけで部屋を出て行った。

(やっぱり夢だったのか)と呟き国枝は額の汗を拭いた。

落ちていたボタンを恐る恐る取って見ると、ボタンの糸は鋭利な刃物で切ったような切り口だった。

朝早々、国枝は無理を言っただけで急遽退院の手続きをした。

道成寺が迎えに来た。

国枝は未明の出来事について話し終わると、道成寺はしばらく考えてから言った。

「笹山篤に間違いないと思うが、何故わざわざここに現れたのかが解せない、単に脅しが目的だったのか、逆に殺そうとしてタイムラグを逸したか、どちらにしても命を狙われた事にかわりない」

「昔ブルースリーの燃えよドラゴンという映画の中で、ハンという悪役のボスがたしか片手が義手でそれを熊手みたいなものと交換し

て戦っていたのを憶えている」

「そう そんな感じで手首の先がナイフだったんだ」と思い出すように国枝が言う。

「奴は日下さんに手を撃たれ、義手になったに違いない それをナイフに変えるとは本当にいい趣味してやがるぜ」呆れた道成寺が言う。

「さあ 行こう 玄関に銀総会のリムジンが迎えに来てるから」と国枝を見て笑う。

久しぶりに外の空気が吸えるのを楽しみに国枝は立ち上がった。

車に乗り込んだ国枝は、助手席に座る幹部の男に挨拶をした。

彼は無言で頷いたが男気が伝わってきた。

道成寺が言った。

「さてまず何がしたい？」

「決まっているだろう 日下さんの墓参りだよ」

「OK！東京までぶっ飛ばせ」と言いながら幹部の肩をポンと叩いた。

車は直ぐに東明高速に乗り東京を目指した。

しばらく男達は無言だったが、考えていることは一緒だった。

(笹山篤を捕まえ、そのバックの巨大組織を壊滅すること)だった。間違いなく戦争になると男達は確信していた。

ずっと黙っていた運転手の若い男が呟いた。

「さっきから尾行しとる車が一台います」とバックミラーを見た。

「どないします」と言いながら助手席の幹部を見た。

「快気祝いじゃ」と言ってダッシュボードからマカロフを取り出した。

「どこぞのSAへ寄ってくれ 返り討ちにしたるわ」

銃のスライドを引いた。

運転手はアクセルを踏み込んだ。

極秘情報

上郷SAへ銀総会の車が入って行く。

駐車場の奥へ駐車し、尾行の車を待った。

国枝たちは運転手を残し車を離れ、各々打ち合わせした通りに物陰に隠れていた。

間もなく大阪から尾行されていた車が現れた。

シルバーのセダンで二人の男が乗っている。

駐車スペースに乗りつけたが辺りを見回しているところをみると銀総会の車を捜しているのだろう。

一人が携帯で連絡をしている。

助手席の男が銀総会の車を発見して指を差しているのが分かった。

間違いなく敵の回し者であることが確認できた。

幹部の男が腰を落としながら車に忍び寄る。

奥で銀総会の車が動き出した。

ゆっくりと尾行車の隣に横付けする。

二人の男は慌てているようだった。

次の瞬間、幹部の男が運転席の男に対し窓越しに銃を発砲した。

ガラスが割れる音と数発の銃声が駐車場全体に鳴り響いた。

男は頭や体に銃弾を受け即死だった。

助手席の男がドアを開け転がり出るように外に飛び出した。

銀総会の若い男がすぐに取り押さえ、リムジンに押し込んだ。

国枝と道成寺が後に続いた。

最後に幹部の男が助手席に乗り込む。

急発進したリムジンは、上り車線を東京へ停まることなく走り始めた。

道成寺が震えて縮み込む中年の男を強引にヘッドロックをして締め上げた。

薄くなった頭頂部の髪が乱れた男は哀れなほど動揺している。

「お願いだ 助けてくれ！」

「殺さないでくれ！」

国枝が道成寺に声を掛け、止めさせた。

ようやく息が出来るようになった男は、肩を上げ下げさせながら国

枝に救いを求める眼で見た。

道成寺が彼の上着に手を入れて探る。

内ポケットの札入れを見つけ、中を調べた。

公安調査庁のＩＤパスが出てきた。

菅原光浩という名前らしい。

国枝が言った。

「何故、公安が私たちを尾行しているんだ？」

「・・・」男は口を噤んだ。

道成寺が拳を男の顎に叩き込んだ。

「話すからやめてくれ 頼む」と男が叫ぶ。

「私は元警視庁特務班だ、嘘はつかない方がいいぞ 菅原さん」

「分かった」と言いながら男は口の血を手の甲で拭い話し始める。

「上からの命令で大阪から君達を尾行したのは間違いない」

「政府からの要請だったらしい」

「君らの動向を細かく本部に報告するのが我々の使命だった」

「君らを最重要テロリスト集団としてブラックリストに載せたとも聞いている」

その男は、質問する手間を省くくらいにペラペラと話し始めた。

国枝は、黙って男の話す言葉を聞いていた。

突然、男の携帯が鳴り出した。

そして彼の携帯電話を出させ、走る車の窓から外に投げ捨てた。

「黒幕は笹山大臣だな！他に何か知っていることはないか？」

「・・・」

道成寺が手を上げそうに成る。

「分かった」と男は両手で顔を庇おうとする。

「近々、銀総会を一斉摘発するのに準備を進めていると聞いている」

「機動班が武装して事務所を掃討するらしい」

その時、幹部の男が振り向いた。

「いつだ？」

「明後日、東京と大阪の銀総会を同時に始めると聞いた」

幹部は携帯でサブロウに連絡を取った。

無縁仏

公安の男を、港北PAで降ろした。

国枝達は、サブロウから教えられた日下が葬られている寺を目指す。

そこは池袋にある永代供養の寺院であった。

血縁者から遺体の引き取りを拒否され、役所の手配でここに納められていた。。

南無阿彌陀仏と書かれた慰霊碑の元に彼は茶毘に伏されているのだった。

家族と一緒に墓に入れない彼の無念さが国枝達にもひしひしと伝わる。

日下の汚名を晴らすべく一刻も早く笹山の犯行であることを白日のもとに晒さねばならない。

国枝は日下の顔を思い出しながら心の中で笹山への復讐を誓う。

その夜、国枝と道成寺は初めてサブロウと対面した。

赤坂の料亭に招かれた二人は、サブロウから歓待を受け最初はしみりと飲んでいたが、酒が進むにつれて日下直樹の話で盛り上がった。

一発で敵を仕留めるガンさばきは見る者を魅了した。

幹部の男が彼の口癖を真似したり、女性の好みも話題に上がった。

まるで4人の男達で日下の御通夜を今行っているような感じだった。

部屋の中で日下直樹の霊も一緒に楽しく酒を飲んでいることだろうとサブロウが言った。

彼の目に涙が浮かんでいた。

話題が笹山篤と2日後の公安庁の急襲の件になった。

銀総会がオウム真理教に続き、破防法の摘要を受けることになったのである。

笹山篤は、未だに大阪に潜伏しているとの情報が入っていた。

大阪府警の庇護のもとに統一教団の施設にいるらしい。

池田の事件からは、笹山の仕業と思われる殺人事件は発生していなかった。

さすがの篤も警察と教団に睨まれたらそう簡単には動けまいと国枝が言う。

サブロウが口を開いた。

東京の事務所は留守番を残し、ほとんどの幹部を関西へ移す。

我々全員も大阪へ戻り、あらゆる手を尽くして笹山を誘き出させる。

出来れば早川警視らも一網打尽に出来れば最高だが。

武器は明日、本牧埠頭からトラックで運び出す予定だ。

邪魔する奴らは全て排除し、躊躇せず抹殺する。

それが銀総会の流儀であり、我々が生き残ってきた要因だ。

隣で幹部の男が頷く。

20代前半にも関わらず胆の据わった若者だと国枝は思った。

道成寺は、統一教団内部の協力者を頼り明日連絡を取ると云う。

国枝は自宅へ一度戻り、支度してから合流すると言った。

幹部の男は今夜中に大阪へ戻り事務所を整理し、新しいアジトを探すと言った。

4・50人が寝泊り出来る規模が必要だとサブロウが言った。

ホテルを丸々貸切りにしますかと幹部の男が笑った。

温泉付きなら最高だな！と道成寺が言う。

皆が大笑いした。

その時、国枝は窓の外に気配を感じ鋭い視線を向けた。

決行前日

国枝の様子に気が付いた道成寺が立って窓を開けた。

しばらく外の様子を窺ったが異常は無かったようだ。

月光を浴び日本庭園の中の草木が風でそよいでいるだけだった。

「気のせいだったか」と国枝が呟く。

それを合図に宴会はお開きとなった。

明日から始まる戦いの日々を思い、彼らは思い思いに目的の場所を目指した。

その頃、笹山篤は兵庫県神戸市にある教団施設に居た。

この施設は、通常の教会施設と違い8階建ての教団占有のビルであった。

周りを緑に囲まれた統一教団関西支部の中核的建造物である。

KCIAの出先機関が秘密裏にこのビルに入っている。

外観は普通のオフィスビルだが構造は強固な要塞となるように設計されていた。

通路は迷路のように配され、初めて入る者は必ず迷うと言われている。

万が一発生した場合のために、侵入者に対する罾も仕掛けられていた。

監視カメラもいたる所に配備され、中央管理室で24時間モニターされる。

地下には武器庫も当然設置されていた。

最上階のVIPルームに笹山篤は匿われていたのである。

先回の轍を踏まないように、教団上層部の要請でほぼ監禁状態であった。

単独行動は許されていない、外出はKCIAのボディガードが付く。体内にはGPSの為の発信装置が埋め込まれている。

国枝と道成寺の抹殺と、銀総会を壊滅するまでは笹山篤は自由になれなかった。

それらは笹山崇の命令でもあった。

盛総理大臣の第二次改造内閣も決まり、政局はようやく落ち着きを取り戻してきていた。

いよいよ明日が、銀総会事務所、全国一斉摘発の日だった。

警視庁機動班と公安庁が協力し、午前11時に査察官立会いのもとに事務所内の搜索と構成員の身柄拘束を目的とした。

早川警視は、齒向かう者は容赦なくその場で射殺するよう命じた。

サブロウの逮捕と国枝と道成寺の生死を問わない身柄確保を目標に置いた。

笹山篤はナイフ型の義手の手入れをしていた。

刃が室内灯で反射するのを見て笹山は興奮し、勃起までしていた。

油を挿し大事そうにケースの中に納めた。

無法地帯

翌日正午前、情報の通り銀総会の事務所に捜査員が押し入った。

だが東京も大阪も事務所は蛻の殻だった。

留守番のアルバイトの学生がいるだけで、重要参考人になる者も証拠類も見つからなかった。

その頃、大阪は西成の古いホテルに銀総会の構成員が集まっていた。ほとんどの大阪市民は近寄らない、日本最大最悪のスラム「あいりん地区」こと釜ヶ崎エリア。

御堂筋線動物園前駅、JR新今宮駅の南側、西成区萩之茶屋・太子・山王の500メートル四方に囲まれた「労働者の街」は、20世紀初頭に誕生した。

当時は日本橋電気街の辺りがかつてのドヤ街（長町スラム）だったのだが、明治36（1903）年に内国勧業博覧会が現在の天王寺公園付近で開催されたのをきっかけに、今の土地にドヤ街を強制移住させたのが「釜ヶ崎」の始まりである。

釜ヶ崎が労働者の街になってからおよそ100年。

いかに時代が変化しようとも、ここには社会の最底辺に生きる者が住まう街として、何一つ変わることはなかった。

昼間から酒を煽って道端で眠りこけるオッサン、冬には凍死するホ

ームレス、炊き出しのボランティア、極左活動家、暴力団、ドライブスルーでヤクが買える街。

それが「西成」。

夕方、本牧埠頭を出た引越し用のレンタカーがホテルに横付けされ、中から大きなスチールケースが次々と運び出されていた。

地元の警察も近づかない場所で、銀総会の新たなアジトとしてこのホテルが貸し切られたのであった。

さっそくサブロウと国枝達は、ホテルの一室で作戦会議を開いた。

一泊2000円のこのホテルは、この地区ではまともな宿泊施設の一つであり結核の感染の恐れも無かった。

個室の部屋も小奇麗である。

外国人のバックパッカーがインターネットの情報でこの地区を知り、近年利用者が増えているようであった。

外国のスラム街に比べればまだ安全ということになるのであるうか。

サブロウの命令であれば、命をも惜しまない特攻隊と呼ばれる若者達が多く、集まった銀総会の構成員は50人を超え、全員に銃器が配られた。

AK47やM16アサルトライフルを中心に自衛隊の小火器もあった。

RPGと呼ばれるロケットランチャーも用意し、ゲリラ部隊と呼べるほどの装備を整えている。

道成寺が銃器の取り扱いや整備の仕方を短時間の内に講習したのである。

作戦会議を前にサブロウが全員を前に口を開いた。

解散

「今日、銀総会の事務所が公安庁により一斉摘発を受けた」

「幸い事前に情報が入っていたので掴まる者も無く無事回避出来たわけだ」

「しかし今後は破防法の適用で、我々の活動がかなり制約されて行く事は間違いない」

「俺は今回の仕事で、銀総会を解散しようと思う」

東京の幹部から驚きの声上がる。

「総長！」

「皆も知っている通り、日下さん一家が国家権力の陰謀により犠牲となった」

「日下さんは俺を弟のように接してくれていた」

「だから身内を殺されたも同然なのだ」

「俺は身内に脅威を与える者は決して赦さない」

「ここに居るお前達も、俺と同じ気持ちでいると思う」

「今夜、笹山篤を捕まえに統一の教団施設を急襲する」

「我々の装備をみても生半可な抗争で無い事は分かるだろ、これは戦争だ！」

「もし少しでも怖気づく者がいるならここから去って行ってくれ」

「俺は責めはしない」

ざわざわと幹部たちが動揺を示す。

大阪支部の幹部の男が言った。

「ちょっとわいの話し聞いてくれんかいの」

「笑い話や」

ある男がラクダに乗って砂漠を旅しとったんよ。

途中でむっっちゃヤリたなって我慢できんようになったから、ラクダで我慢しようとしたけ

ど、ラクダが暴れてどうにもこうにもでけへんかったらしいわ。

男は諦めて、旅を続けると砂漠の真中で車が立ち往生してやないか。

近づいてみると、金髪のプリツ、キュツ、ぼぐんのねえちゃんが困った顔で「助けてくれ

たら、どんなお礼でもする」と言ってきたらしいわ。

「ほんまやな？ほんまに、何でもしてくれんねんな」

男も必死のパッチや。ヤリとくして、ヤリとくしてしゃあなかつたんやから。

気合で車を直して、エンジンがかかるんが早いから、ズボンのベルトを力チャ力チャ緩めな

がら、

「ねえちゃん！ちよつとラクダ抑えといてんか！」

一瞬、間があつて皆が噴き出した。

「さあ 皆さん日下はんの怨みを晴らしに奴らのタマ取りにいきましよう」

全員が一斉に雄叫びを上げる。

立ち上がった国枝が、地図を指し侵入の方法と役割分担を簡潔に説明した。

程なくトラックが5台、ホテルの前に横付けになった。

そして襲撃の最終準備を始めトラックに次々と乗り込んだ。

戦場

堂谷池（須磨の大池）のほとりにその教団のビルがあった。

人目につかないように湖とビルの上にトラックを止め、銃器を持った構成員たちが機敏に降り集合した。

そして湖周辺のパーキングエリアにトラックを分散させて駐車させた。

時刻は夜の12時を廻っている。

第一波の突撃部隊がビル正面玄関に回りロケットランチャーを構えた。

第二波の突撃班が非常口を狙っている。

緊急通報を受け警察が到着するまで10分である。

速やかに行動を起こさねばならない。

笹山篤の拘束を第一目標に国枝は突入の号令を掛けた。

物凄い爆発音と共にビルの正面と裏側が爆破された。

総勢50人の侵入者がビルの中に入入して行く。

サブロウが数人の幹部を従えその様子を見ている。

笹山発見の無線を受け突入の機会を窺っていた。

第一波の国枝の部隊が2基のエレベーターと階段を使い最上階を指していた。

第二波の道成寺の部隊は非常階段を昇っている。

全員に防毒マスクの携帯をさせていた。

非常ベルが鳴り響く中、エレベーターの1基が突然停止した。

無線からガスが噴出していると叫び声が聞こえる。

国枝は無線でマスクの着用を促したが、時すでに遅くエレベーターに乗り込んだ8人の構成員たちは猛毒のガスが充満するなかで絶命していった。

もう1基のエレベーターが降りてきた。

国枝はマスクを装着して10人の部下と乗り込んだ。

3階を過ぎたあたりで急停止した途端、足元からガスが噴出しだす。

ガス室と化したこのエレベーター内ではマスクの効果がどれだけ続くか不安になる。

急遽、ドアを抉じ開け始めた。

ようやく開いたドアの向こうにバリケードを築いたKCIAのエージェントが銃を向けていた。

咄嗟に国枝は手榴弾を取り出し、クリップを外し投げ突けた。

バリケードの下に転がり込んだ手榴弾は、爆発音と共に数人の敵を巻き込み木っ端微塵となる。

エレベーターの10人は、撃たれた3人以外全員が一斉に射撃体勢にはいった。

粉塵が舞う中、銃弾が閃光を引きながら敵を殲滅する。

敵の何人かが慌てて逃げ出して行くのが見える。

怪我を負った仲間を避難させて、国枝を含めた5人は最上階を指し階段室に入る。

先に階段を上がって行った道成寺たちが4階で交戦していた。

敵は大口径のM134ガトリングガンで掃射していて、一步も動けない状態であった。

壁が銃弾を受け穴だらけになっている。

兆弾のために仲間が次々と倒れていく。

道成寺が手榴弾を投げた。

一時、銃撃が止んだが、2次攻撃がまた始まる。

国枝が時計を見た、時間が押していた。

犠牲

道成寺が振り返り防弾ベストを肌蹴た。

内側には、無数の手榴弾が提げられている。

よく見ると安全装置のクリップが全て外されていた。

「道成寺 お前！」と国枝が言った。

「国枝さん 必ず笹山を掴まえてくれ」と言うのと同時に彼は駆け出した。

「全員伏せるんだ！」と国枝が叫ぶ。

道成寺は89式小銃をフルオートで掃射しながら敵に突っ込んでいった。

轟音が巻き起こりビルが立て揺れる。

粉塵が舞う中で静寂があたりを包み、攻撃してくる者はもういなかった。

咳き込む仲間たちがふらつきながら立ち上がり始めた。

そして国枝が20人あまりの構成員を従え、最上階の8階を目指し階段を駆け上がる。

国枝は慎重に扉を開けたが、狙ってくる狙撃手はいない。

8階のフロアは、廊下が二手に分かれ部屋が並んでいた。

10人づつ手分けをして廊下を進みながら、各部屋を調べて行くように国枝は指示した。

その時、突然ビル内の照明が全て消え始めた。

非常灯さえも壊されたようだ。

真っ暗な中、全員がLEDライトを銃に取り付ける。

緊張が男達を包む。

「必ず二人一組で背後も警戒して歩くんだ」と国枝が声を掛ける。

しかし、こういう状況に慣れない銀総会の構成員は恐怖のあまりバラバラになっていく。

そのうち孤立している者から敵に襲われているようで、やがて方々に悲鳴があがり始めた。

「助けてくれ！」

最上階はパニックに陥った男達が遮り無二発砲を繰り返す、同士撃ちになる者もいた。

国枝は発砲を止めさせ、一度退かせなければと思ったが、一人また一人と敵の術中に嵌っていく修羅場となり手のつけようがない。

待機していたサブロウ達が無線でこの異常事態を察知し、必死の形相で階段を駆け上がって来ていた。

監視モニターでその姿を追う一人の男がいる。

手にナイフを装着した笹山篤であった。

化け物

中央管理室のテーブルの下には、笹山に殺された教団の関係者が転がっていた。

笹山篤は地下の管理室を出ると、エレベーターを使い5階で降り非常階段へ向かう。

笹山はエレベーターの中で銀総会の構成員の死体から剥ぎ取った迷彩服と防弾ベストに着替えていた。

ヘルメットにゴーグルをしているため笹山と気付く者はいないはずだ。

そしてサブロウを先頭に駆け上がっていく5人程の集団の中に最後に着いた。

そして後ろから近づき一人づつ喉を切り裂き始めた。

大阪の幹部が異変に気付き後ろを振り返ると誰も居ない。

「総長！後続が断たれました」と叫ぶ。

立ち止まったサブロウと幹部の男は、追い駆けてくる敵を待ち構えた。

だが姿を現したのは、味方の姿だった。

全身血だらけの状態、やっとの事で歩いているようで二人に向か

って倒れ込んできた。

幹部の男が手を差し出し体を支える。

「大丈夫か？」

次の瞬間、幹部の背中から光る何かが飛び出した。

「グウ・・・」とつめき声を発した幹部の男は、相手の腕を掴みその場に崩れた。

「菅原！」とサブロウが叫ぶ。

咄嗟にサブロウはガバメントを構え撃つたが不発だった。

そして弾詰まりを起こした銃を笹山に投げつけた。

一瞬怯んだ男は、掴まれた手を必死に振り解きヘルメットとゴーグルを脱いだ後、サブロウに向かってナイフを突きつけた。

「お前が 笹山だな」サブロウは言いながら睨む。

もの言わぬ男は、不敵に笑うと閃光を放ちながらナイフを振り回してきた。

血しぶきも一緒に飛んでくる。

サブロウは軽くダッキングしながら相手の攻撃をかわした。

そして右フックを笹山の顔面に叩き込む。

よるめきながらも憤怒の唸りをあげた笹山が、サブロウにさらに襲い掛かる。

だが笹山は、もんどりうって転倒した。

足を滑らしたのである。

倒れている菅原の体の下から血が湧き出し、踊り場の床を血の池にしていた。

すかさずサブロウは、靴で笹山の左手のナイフを踏みつけた。

鈍い音をさせ、手首からナイフが外れた。

そのあまりの痛さに笹山がうめく。

その後は、一方的なサブロウの殴打が笹山を襲う。

気絶した笹山を残し、サブロウは8階に上がった。

真っ暗なフロアには国枝と数人の構成員が円陣を組み、敵の襲撃に備えていた。

その時、突然開いた後ろの扉の向こうから、サブロウの声が聞こえる。

「笹山を見つけたぞ　すぐにここから脱出するんだ」

数発の銃弾がサブロウの頭を掠めて飛んでいった。

サブロウは煙幕弾を国枝達の頭越しに敵に向けて投げた。

もうもうと煙立つ中を、サブロウの元へ男達は逃げ込んできた。

「本当に見つけたのか？」国枝が聞く。

「7階の踊り場で泡を吹いて寝ているよ」とサブロウが言った。

そこに引き返した男達が見たものは、バラバラにされた菅原の体だった。

笹山の姿は影も形も無い。

「何てことだ！」サブロウは絶句した。

「奴は化け物か」と国枝を見た。

国枝は真剣な目で頷いた。

突破

階下へ続く階段に笹山の足跡が赤黒く残っていた。

銃を構えたサブロウ達は跡を追う。

突入から20分は過ぎていた。

外から消防車のサイレンが鳴り響き、初動班の警察車両も駆けつけているようだった。

きつとビルの周りは騒然としていることだろう。

機動隊も要請されているはずだ。

サブロウは携帯を取り出しどこかに連絡を取った。

そして「頼む」と言って電話を切った。

1階のフロアに達するとサーチライトの光が交錯している。

笹山のうしろ姿がシルエットになって浮かび上がった。

「笹山！逃がさんぞ」とサブロウが吼える。

国枝の合図で、銀総会の部下達が笹山を中心に取り囲んだ。

その時、早川警視が発する拡声器の音が聞こえた。

「お前達は包囲されている 死にたくなければおとなしく投降せよ」
機動隊のスナイパーが木陰から照準を合わせていた。

「射撃班 準備完了しました」と早川のイヤホンに連絡が入る。

「了解 指示を待て」

あっけなく笹山は手を上げサブロウ達に降伏した。

国枝が腕の関節を取りつつ伏せに倒し、左手の血まみれのナイフを取り外した。

笹山は返り血も酷かったが、自分の左手首からも大量の出血をしていた。

サブロウから受けたダメージらしい。

放って置いてもいいが、ここで死なれては日下の汚名が晴らされないと思つた国枝は、
応急処置で止血をしてやる。

サブロウは、外を窺っていた。

生き残つた味方は全部で8人だった。

拡声器による早川の説得が続く中、背後では着々と突入隊の準備が進む。

機動隊の装甲車が到着した。

サブロウが笹山篤を盾にしてビルの瓦礫の中から姿を現した。

一斉にレミントンM24スナイパーライフルのターゲットになった。

早川が暗視スコープで覗くとそこに立って居るのが笹山篤だと判った。

「人質がいる！笹山大臣の息子だ 狙撃はするな」と慌ててインカムで指示した。

だが、一人の狙撃手から後ろに立つ男の頭部に照準が合ったと報告が入った。

「自信はあるのか？」と早川が聞く。

「はい」と答えが返ってきた。

「任せる」としばらく考えてから早川は言った。

狙撃手の男は、レティクルの照準をサブロウの眉間に合わせていた。

一度眼を瞑り、そして眼を開け深く息を吐いた。

そしてゆっくりと引き金を絞り込んでいく。

突然、ヘリコプターの回転翼の音が辺りを覆う。

サブロウから要請された小型ヘリだった。

閃光弾が次々と警察の包囲網の上にはら撒かれた。

巻き上がる風と眩しさのために警察と機動隊員はパニックとなった。そんな中、一発の銃声が鳴り響き、サブロウの足元に着弾した。

身の危険を感じたサブロウは笹山を引き摺るようにビル内に引き返した。

そしてサブロウ達は裏口へと向かう。

へりはビルの周辺を旋回しながら閃光弾を撃ち続けていた。

警察車両が燃え上がり、辺りは真昼のように明るくなっていく。

右往左往する警察官を横目に、サブロウ達はビルから脱出するために裏口の駐車場から飛び出した。

M16アサルトライフルをフルオートで掃射しながら9人の男達は直近に停めてあるトラックを目指した。

頭上ではへりからも援護射撃をしている。

笹山をトラックに放り込み全員が乗り込む。

急発進し猛スピードで駐車場を飛び出した。

惨事

フロントガラスを割られた2台の警察車両は遠巻きに急停車し、飛び出した警察官が車を盾に応援を待っているようだった。

しばらく経つと数十台の警察車両の赤色回転灯の群れが接近してきた。

「国枝さん 笹山を連れてここから脱出してくれ」とサブロウが言う。

「俺達は出来る限りここで時間を稼ぐから 頼む！」

頷いた国枝は、笹山に銃を突きつけながら国道脇の住宅街の市道に入っていく。

トラックを取り囲んだ警察車両から機動隊員が降り立ち次々とライフルを向け始めた。

サブロウ達はありつただけの銃弾を撃ち込みながらタイヤや車両を破壊していく。

物凄い銃撃戦が展開され始めたが、サブロウ達の弾薬も尽きつつあった。

防護盾を使う機動隊員がじわじわと押し寄せてきた。

サブロウは手榴弾を配り、最後の手段を取った。

全員を一ヶ所に集め、機動隊員が取り囲む瞬間を待った。

仲間全員に向かって言う。

「よくここまで俺について来てくれた 感謝する」

「総長！」

「生まれ変わる事が出来ても、二度と闇のしわざには戻って来るなよ」

靴音が迫って来た。

「また地獄で会おうな みんな！」

サブロウは安全クリップを外す。

サブロウに覆い被さるように部下達がクリップを外しながら腹に抱えた。

轟音が轟いた。

機動隊員数十名を巻き込んだ大惨事となった。

側に建っていた小学校の校舎の窓ガラスが全て吹き飛んだ。

後方で起こった大爆発に、国枝と笹山が振り返った。

破片がパラパラと上空から降り注ぐ。

まるで雪のようだった。

「サブロウ……」と国枝が呟く。

ハッと我に振り返り向く。

だがそこに笹山篤の姿が無かった。

薄暗い住宅街の中に冷酷な野獣が放たれたのだ。

国枝は必死で辺りを探したが無駄だった。

彼は天を仰ぎ、全身から発するように咆哮を搾り出した。

（死んでも見つけ出す）

国枝は道路に這いつくばり耳を押し当てた。

インディアンのハンターのようにな。

油断

国枝は五感を集中させ笹山の靴音を捉えようとした。

明け方の住宅街の中、走る男の靴音はきつと反響しているに違いない。

さらに国枝は、G Iブーツの型底がアスファルトを蹴る音は、低く共鳴してくると確信していた。

（捉えた！）

国枝は立ち上がり、全速力で駆け始めた。

猪名野神社まで辿りつくが、まだ笹山の姿を見つけることが出来ない。

国枝は道を左に折れて進むと中央分離帯のある国道13号線に出た。

伊丹市美術館のところで息を整えていると、非常ベルが鳴っているのが聞こえる。

（どこだ！）

辺りをゆっくり見回してベルの鳴る方向を探す。

国道を隔てた向かいに二トリがあった。

奴が忍び込んだのは、あそこに違いないと思った国枝は銃を構え接

近して行った。

近づくとベルの音がさらに大きくなった。

その頃、笹山篤は二トリの店舗のショーウィンドウを壊し中に侵入していた。

目指したのは台所用品の売り場だった。

一番先の鋭い柳場包丁を選び、紐で左手に固く括りつけた。

黒いタオルをその上から巻きつける。

予備にもう一本を懐に入れた。

建物を壊した時から非常ベルが鳴り出ししていた。

準備が整った笹山は侵入した場所へ戻り外に出ようとしたが突然、鋭い音をたて銃弾が襲ってきた。

(国枝のオヤジがもう追いつきやがった)

慌てて店の中に戻り、隠れ場所を捜して走り出した。

慎重に国枝が建物の中へ入って行く。

思ったより中は明るかった。

(飛び道具を使わない奴だから安心して接近が出来るはず)と思い、声を掛けながらフロアを探索した。

「笹山！お前が隠れている事は判っている　すぐに警備員も駆けつけてくるぞ」

「いいか　早く俺の前に出て来るんだ　殺しはしないから」

「俺の目的は、お前を法廷に引つ張り出す事だけだ」

「日下さんの汚名を晴らし、貴様が虐殺した人達を成仏させたいのだ」

「いい加減に諦める　笹山！」

1階のカーテン売り場の奥で影が走った。

見逃さない国枝は、先回りして不意を衝こうと考えた。

足音が向かって来る。

陳列棚の影に隠れている国枝は、リボルバーの銃弾を確かめて待っていた。

しかし10メートル手前で、何故か足音が停まった。

国枝が痺れをきらし通路に飛び出した。

その瞬間、ペティナイフが飛んできた。

国枝の太股に突き刺さった。

またナイフが国枝の肩に食い込む。

致命傷を負う前に足を引き摺りながら柵の裏に回りこんだ。

動脈は損傷していないが、かなりの出血をしている。

ナイフは抜かず、ベルトを外し太股の止血をした。

その時、笹山が叫んできた。

「おっさん 油断したようだな無茶しやがって」

警察車両のサイレンが近づいて来ていた。

「止めをさしたいところだが邪魔が入ったようだ ついてるなおっさん」と言って笹山は、壊れたショーウィンドウから出て行った。

「何を企んでる 笹山！ もう止めるんだ おい！・・・」

意識が無くなる前に国枝は、銃を笹山の背に向け撃ち尽くした。

笹山は、身を縮めながら道路に飛び出し、正面遠くに見える福知山線伊丹駅を目指す。

異常事態

早川が駆けつけた時、国枝は救急隊員に応急処置を受け救急車に運ばれようとしていた。

「国枝君 笹山の行方が判るか？」と意識を戻した国枝に聞いた。

「奴はまた無差別殺人を起こす気だ 頼むから止めてくれ・・・」と喉が渇くのか掠れた声でさらに国枝は続けた。

「きつと人が大勢集まる所だ・・・逃げ場がないような場所・・・バスの中や電車の中・・・きつとそうだ」

早川は耳を国枝の口に寄せ必死に聞き取るうとしていた。

「いい加減にしてください すぐに病院に行かなければ危険な状態です」救急隊員に諭された。

早川は、部下の方に向かって叫んだ。

「ここに一番近い駅はなんだ？」

「200Mほどで福知山線の伊丹駅と阪急線の駅があります」

早川は携帯である場所に連絡した。

「状況はさらに悪くなっています もうこれ以上、隠蔽することは不可能になりつつあります」

「はい 判りました 出来る限り追跡を試みてみますが、発見が遅れた場合の対処はそちらに一任します 私はもう降ろさせて頂きますので」と早川は冷たく言い放ち電話を切った。

数名の部下を連れて早川は福知山線の伊丹駅へ向かうため車に乗った。

ホームに出てみると、ちょうど快速電車が入ってくるころだった。

宝塚発 JR東西線經由片町線（学研都市線）同志社前行きの上り快速列車である。

列車番号は5417Mの7両編成で、前4両は京田辺行きであった。

宝塚を出る時は、通勤や通学の乗客が100人以上乗車していた。

朝9時になる頃で上り線ホームには、疎らながら乗客達が一列に並んでいた。

早川と部下は車両を一台つつ窓越しに覗いていく。

発進の合図がアナウンスされ始め、乗客は乗り込みながら座る席を捜して歩いて行く。

小走りになった早川は最後の車両に辿り着いた。

（奴がいた！）

最後尾の車両のホームから逆側の窓際に立ち、外を眺めている男がいた。

見覚えのある迷彩のBDUのパンツを履き左手を隠している。

早川は閉まり始めたドアに手を掛けて中に飛び込んだ。

後続く部下が、啞然として彼を見送る。

「次の駅に先回りしていてくれ」と早川は携帯で指示した。

笹山は早川が乗り込んで来たことに全く気が付いていないようだった。

部下と合流するまで、早川はしばらく遠目に笹山を監視した。

伊丹駅から乗り込んできた異様な出で立ちの若い男に乗客達は警戒感を抱いた。

黒い長袖シャツに迷彩柄のダブダブのスポンをはき、黒いミリタリーブーツは赤黒い染みをいたるところに付けて薄汚れていた。

左手を黒い布で隠し脇の下に挟んでいる、車両の隅の壁に身をゆだね車窓から外を眺めている。

誰が見ても殺気が漂う異常者であることが判った。

死臭のような体臭を発散させている。。

電車内は8割の混み具合だったが、笹山の周りは人一人分の空間が開いていた。

気の弱い乗客は、早川の横を通りながら隣の車両に移っていく。

段々と笹山の乗る車両の乗客が少なくなっていく。

笹山は、ただ流れる風景をじっと見ているだけだった。

しかし乗客のストレスがパニックへと変わっていった。

我先に前方の車両に詰め掛け始めた乗客は、殺人鬼が乗っていると声をあげ始めた。

早川もこのままでは自分の姿が見つけられてしまうと感じ人々の流れに乗って車両を移った。

そして笹山の乗る車両は、誰も居なくなった。

午前9時を廻っていた。

二人の車掌が通報により異変に気づき、笹山の車両の様子を窺いに来た。

「あの 失礼ですが乗車券を拝見できませんか？」と年配の車掌が恐る恐る聞いた。

「・・・」

振り向いた男は、にっこり笑い左手を動かす。

ほっとした車掌は同僚に向かって安心した顔をした。

しかしその同僚の顔に一筋の赤い液体が顔を斜めに走っていった。年配の車掌の首がぱっくり割れて鮮血が噴出したのだ。

仰向けに倒れた車掌は、床の上で痙攣を始めた。

笹山は包丁に着いた血を舌で舐め、錆のような味を楽しみながら若い車掌を睨みつける。

蛇に睨まれたように、若い車掌は金縛りに遭い立ち尽くすだけだった。

その様子を隣の車両で見ていた乗客から悲鳴が沸き起こる。

失神する女性もいた。

誰も倒れた乗客に構う余裕なく、パニックに陥った乗客はさらに逃げ場を求めて最前の車両へ殺到した。

逃げ場を失った乗客に向かって、笹山は切り取った若い車掌の腕を投げつけた。

奇声を発した笹山は、次々と乗客達の背中を抉っていく。

一人の男によって快速列車は生き地獄と化した。

運転席では、乗客からの緊急通報を受けてコントロールセンターに連絡を取ったが、何故か不通である。

しかも電車の速度が自然に上がり始めていた。

（何だ これは 考えられない どうなっているんだ！）と運転手が呟く。

脱線事故

早川は慌てて銃を抜き、声を荒げて叫んだ。

「全員 伏せるんだ！ 邪魔だ！」

銃口を笹山に向けるが、パニックに陥った乗客の群れに押し戻されていく。

仕方なく早川は銃を天井に向けて発砲させた。

一瞬、車両内が静まり返った。

ただ異常なほどレールを疾走する車輪の音が高鳴っていた。

軋み音が列車の悲鳴のように聞こえる。

だがそれに気付く乗客は誰もいなかった。

「屈め！伏せろ！」

早川の銃に気付いた人々が頭を抱え床に伏せた。

笹山の姿が浮かび上がった。

刺殺した死体の上に乗り上がってこちらに向かって来ようとする。

その無表情な顔が不気味だった。

早川は笹山の胸を狙って引き金を3回絞った。だが5メートルも無い距離なのに揺れる車両のせいで狙いが外れてしまう。

笹山のナイフが早川の頭上に振り上げられた。

悲鳴が交錯する。

早川は銃口を眉間に向けて「死ねや！」と言った。

カチと虚しい空撃ちの音が響く。

「しまった！」早川は残弾の確認をしていなかった事を後悔した。

ナイフが早川の脳天に突き刺さった。

目玉が飛び出した。

笹山は即死した早川に馬乗りになり、何十回もナイフを突きたてる。

あまりの恐怖に車内は水を打ったように静かになっていた。

同じ車両に居る乗客達は、笹山の振り上げ振り下ろす凶器の動作をただ見つめるだけだった。

飛び散る血が辺りを染めていく。

その時、轟音と共に車体が大きく傾き始めた。

死体が天井にぶつかるように飛び撥ねる。

鋼鉄がすり潰される悲鳴のような轟音が鳴り響く。

人々が先頭車両の方へ磁石で引っ張られるように飛んで行き、人間と言っより浮遊物体と化していた。

笹山が狂気の絶叫を発し、鋼鉄の茨の中に巻き込まれていく。

審判

4月25日午前9時19分頃に西日本旅客鉄道（JR西日本）の福知山線（JR宝塚線）塚口駅 - 尼崎駅間で発生し、運転士と乗客を合わせて107名の死者を出した列車脱線事故である。

事故後の検証で、先頭車両が脱線、急減速した影響で車列が折れ、連結器部分で折り畳まれるような形になったために、玉突きになって被害が拡大したと検分された。

当時、事故車両の1両目は、片輪走行で左に傾きながら、マンション脇の立体駐車場と同スペースに駐車していた乗用車を巻き込み、マンション1階の駐車場部分へと突入して壁にも激突。

続く2両目も、片輪走行しながら、マンションに車体側面から叩きつけられる状態に加えて3両目に追突されたことによって、建物に巻きつくような形で大破。

3両目は、進行方向と前後が逆になる。4両目は、3両目を挟むようにして下り方向（福知山方面）の線路と西側側道の半分を遮る状態でそれぞれ停止した。

なお、事故発生当初、事故車両の2両目部分が1両目部分であると誤認されており、1両目は発見されていなかった。後に本来存在しているべき車両数と目視で確認できる車両数が一致しないことから捜索され、発見された。

救助作業は、駐車場周辺において電車と衝突して大破した車からガソリン漏れが確認されており、引火を避け、被害者の安全を確保す

るためにバーナーや電動カッターを用いることができなかつたために難航した。

また、3両目から順に車両を解体する作業を伴い、昼夜を問わず24時間続けられ3日後の4月28日に終了した。

近隣住民及び下り列車に対しての二次的被害は免れたものの、直接的な事故の犠牲者は、死者107名(当該列車の運転士含む)、負傷者562名を出す未曾有の大惨事となった。

犠牲者の多くは1両目か2両目の乗客で、ほとんどが多発外傷や窒息で亡くなっており、クラッシュ症候群も確認されている。

死者数において、JR発足後としては1991年の信楽高原鐵道列車衝突事故(死者42名)を抜いて過去最大となり、鉄道事故全般で見ると戦後(国鉄時代含む)では桜木町事故(106名)を上回り、八高線の列車脱線転覆事故(184名)・鶴見事故(161名)・三河島事故(160名)に次いで4番目、戦前・戦中に遡っても関東大震災時の根府川駅被災(112名)を含めた中で7番目となる甚大な被害を出した。

後に、事故では負傷しなかった同列車の乗客やマンション住人、救助作業に参加した周辺住民なども心的外傷後ストレス障害(PSTD)を発症するなど大きな影響を及ぼした。

また、マンションには47世帯が居住していたが、倒壊した場合などに備えてJRの用意したホテルなどへ避難した。

事故後も2世帯が残っていたが、8月上旬までに順次マンションを離れていった。

エピソード 慟哭

1年後

国枝大輔は自宅で悪夢に魘されて起きた。

ベッドから抜け出し足を引き摺りながら台所に行き、コップの水を一気に飲み干した。

今日は日下直樹の命日であった。

献花を持った国枝は、ようやく家族と同じ墓に葬られた直樹の眠る日下家の墓前に立った。

(良かったな 日下さん) 国枝は涙が止まらなかった。

抜けるような青空の下、焼香を済ませ、あの日の事を思い出していた。

銀総会の男達はどうなったのだろうか。

サブロウや大阪支部の菅原、道成寺がどこに葬られたのか情報が全く無かった。

爆死した彼らの亡骸が発見されたかさえ判らない。

ただ笹山篤の犯行が明るみになり、笹山崇國務大臣が失脚、盛内閣が退陣した。

篤の母親も自宅で自殺しているのを発見されていた。

早川警視の遺体は他殺体で発見されたが、犯人である笹山篤の死体だけが未だに見つかっておらず、無差別連続殺人犯として被疑者不在のまま書類送検された。

裁判所の裁定は死刑だった。

国枝はその後警視庁に復帰したが、笹山に受けた傷の後遺症のために現役を退いた。

警視庁上層部への不審感もあった。

今は弁護士を目指し司法試験に向けて猛勉強をしている。

だが今でも時々、笹山篤の幻影に襲われ悪夢に魘される夜があった。

新聞を見るたびに凶行される殺人事件のニュースに、笹山の影がなにか考え込む事もしばしばだった。

何故あの青年は、恵まれた環境に育ちながら悪魔の申し子になってしまったのか。

犠牲になった者達の無念さを思うと今でも胸が痛み出す。

明日は坂本弁護士一家の命日だった。

（龍彦君に会いに行こう）と国枝は呟いた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9287v/>

世田谷一家惨殺事件

2011年8月27日03時48分発行